

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ

泉南市文化財調査報告書 第十五集

1988. 3

泉南市教育委員会



## 序 文

過去の文化遺産を発掘し継承していくという私達の作業は、施設建設などの開発行為に比して一見地味で華々しさに欠けるようですが、けっしてそのような側面ばかりではありません。

例えば、現在の食文化を考えるためには、日本人が米をつくり食すようになるまでの過程をすることが、必要不可欠であります。これは衣食住に限らず、現代のあらゆる事象についてもあてはまることはあきらかです。

このように、物質的あるいは精神的なあらゆる面で、現代の日本文化を探求するためには、時間を遡り文化を構成する諸要素の源流を追求していく作業が必要とされるのです。そのためにも文化財の調査が必要とされるわけです。

関西新国際空港の工事も着工以来はや1年が過ぎましたが、当泉南市域におきましてもこれに関連して種々の開発が激増しております。開発は埋蔵文化財を破壊する可能性があり、先人の残した貴重な文化遺産を失うことになりかねません。そのため発掘調査をおこないますが、このような状況のもと、発掘調査は急増の一途をたどっております。市域内では小規模の調査が圧倒的多数を占めていますが、これまでに多くの資料が蓄積されてきました。

このような発掘調査の成果として、信達大苗代に所在いたしますところの白鳳寺院・海会寺跡が、今年度中に国の史跡に指定されましたことは、まことによろこばしいかぎりです。小規模調査の成果の蓄積がこのような大きな成果をもたらしたわけですが、これも皆様方のあついで援助、ご協力のたまものでございます。ここに重ねて篤くお礼申し上げますとともに、文化財保護行政への今後よりいっそうのご援助、ご協力をお願い申し上げます。

昭和63年 3 月

泉南市教育委員会

教育長 山 田 静 也

1. 本書は、泉南市教育委員会が昭和62年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当、実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎・岡田直樹を担当者として、昭和62年4月1日着手し、昭和63年3月31日終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、神沢かずみ、土井憲代、細川法子、岡崎勢津子、大石智津、伊藤智子、菊敏宏、根来正彦、榎本芳子、新居田美穂、今本真美、新居田美紀、西野徹、幸前和裕、樫元勝人、嶋田力、高松徹、上林恭一、清川善幸諸氏の協力を得た。

また、広瀬和雄、福田英人、土山健史、武内雅人、土井孝之、谷美光、向井俊生の諸氏からも有益な助言を得た。記して感謝の意を表する次第である。なお、本書の執筆は仮屋・岡田があたり、編集は主に仮屋が行った。

4. 本調査にあたっては、写真、スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。
5. 以下の事項は凡例として示す。
  - 遺構実測図に示めたレベル高はすべて T.P.+値 ( $m$ ) である。また、方位は磁北をしめた。
  - 本文中の遺構名称は S D—溝、S K—土坑、S X—その他の遺構をそれぞれ表わす。
  - 遺物実測図の番号は、図版中の写真番号と一致させた。
  - 遺物実測図では断面の表示を、須恵器—黒塗り、土師器・陶磁器—白塗り、瓦器—トーンによって表わした。
  - 第5表の番号は、PL.1の番号と一致させた。

# 目 次

|                    |              |    |
|--------------------|--------------|----|
| 第1章 調査の経過 .....    | ( 仮屋 ) ..... | 1  |
| 第2章 男里遺跡の調査 .....  |              | 5  |
| 第1節 既往の調査 .....    | ( 岡田 ) ..... | 5  |
| 第2節 第1区の調査 .....   | ( 岡田 ) ..... | 6  |
| 第3節 第2区の調査 .....   | ( 仮屋 ) ..... | 10 |
| 第4節 第3区の調査 .....   | ( 仮屋 ) ..... | 11 |
| 第5節 第4区の調査 .....   | ( 岡田 ) ..... | 12 |
| 第6節 第5区の調査 .....   | ( 岡田 ) ..... | 13 |
| 第7節 第6区の調査 .....   | ( 岡田 ) ..... | 14 |
| 第8節 第7区の調査 .....   | ( 仮屋 ) ..... | 14 |
| 第9節 第8区の調査 .....   | ( 岡田 ) ..... | 15 |
| 第10節 第9区の調査 .....  | ( 岡田 ) ..... | 16 |
| 第11節 第10区の調査 ..... | ( 仮屋 ) ..... | 16 |
| 第3章 幡代遺跡の調査 .....  | ( 仮屋 ) ..... | 18 |
| 第1節 既往の調査 .....    |              | 18 |
| 第2節 調査の成果 .....    |              | 19 |
| 第4章 仏性寺跡の調査 .....  | ( 岡田 ) ..... | 24 |
| 第1節 既往の調査 .....    |              | 24 |
| 第2節 調査の成果 .....    |              | 24 |
| 第5章 岡中遺跡の調査 .....  | ( 岡田 ) ..... | 33 |
| 第6章 まとめ .....      | ( 仮屋 ) ..... | 51 |

## 挿 図 目 次

|      |                      |    |
|------|----------------------|----|
| 第1図  | 男里遺跡第1区地形図 .....     | 7  |
| 第2図  | 男里遺跡第1区土坑 .....      | 7  |
| 第3図  | 男里遺跡第1区出土の土器 .....   | 8  |
| 第4図  | 男里遺跡第1区土坑出土の銭貨 ..... | 9  |
| 第5図  | 男里遺跡第3区出土の土器 .....   | 12 |
| 第6図  | 男里遺跡第10区出土の平瓦 .....  | 17 |
| 第7図  | 幡代遺跡調査区位置図 .....     | 19 |
| 第8図  | 幡代遺跡出土の土器 .....      | 21 |
| 第9図  | 幡代遺跡出土の平瓦 .....      | 23 |
| 第10図 | 仏性寺跡調査区位置図 .....     | 24 |
| 第11図 | 仏性寺跡出土の土器 .....      | 28 |
| 第12図 | 仏性寺跡出土の軒瓦 .....      | 29 |
| 第13図 | 仏性寺跡出土の丸・平瓦 .....    | 31 |
| 第14図 | 岡中遺跡調査区位置図 .....     | 33 |
| 第15図 | 岡中遺跡SX01 .....       | 35 |
| 第16図 | 岡中遺跡集石遺構 .....       | 39 |
| 第17図 | 岡中遺跡出土の軒丸瓦 .....     | 42 |
| 第18図 | 岡中遺跡出土の平・道具瓦 .....   | 43 |
| 第19図 | 岡中遺跡出土の銭貨 .....      | 44 |

## 表 目 次

|     |                    |   |
|-----|--------------------|---|
| 第1表 | 発掘および試掘届出一覧表 ..... | 2 |
| 第2表 | 発掘調査一覧表 .....      | 2 |

|     |                    |    |
|-----|--------------------|----|
| 第3表 | 試掘および分布調査一覧表 ..... | 3  |
| 第4表 | 立会調査一覧表 .....      | 4  |
| 第5表 | 遺跡一覧表 .....        | 54 |

## 図 版 目 次

|        |                   |
|--------|-------------------|
| PL. 1  | 泉南地域の文化財          |
| PL. 2  | 男里遺跡調査区位置図        |
| PL. 3  | 男里遺跡調査区①          |
| PL. 4  | 男里遺跡調査区②・幡代遺跡調査区  |
| PL. 5  | 仏性寺跡遺構図および断面図     |
| PL. 6  | 岡中遺跡遺構図および断面図     |
| PL. 7  | 男里遺跡第1区出土の丸・平・道具瓦 |
| PL. 8  | 岡中遺跡遺構出土の土器       |
| PL. 9  | 岡中遺跡包含層出土の土器      |
| PL. 10 | 男里遺跡第1区           |
| PL. 11 | 男里遺跡第2・3区         |
| PL. 12 | 男里遺跡第4・5区         |
| PL. 13 | 男里遺跡第6・7区         |
| PL. 14 | 男里遺跡第8区           |
| PL. 15 | 男里遺跡第9・10区        |
| PL. 16 | 幡代遺跡調査区           |
| PL. 17 | 仏性寺跡調査区①          |
| PL. 18 | 仏性寺跡調査区②          |
| PL. 19 | 岡中遺跡調査区①          |
| PL. 20 | 岡中遺跡調査区②          |

- PL. 21 男里遺跡第1区出土の土器
- PL. 22 幡代遺跡・仏性寺跡出土の土器
- PL. 23 仏性寺跡出土の軒瓦・岡中遺跡出土の平・道具瓦
- PL. 24 岡中遺跡出土の土器①
- PL. 25 岡中遺跡出土の土器②

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書V

## 第1章 調査の経過

男里遺跡は長径1.3 km、短径0.75 kmと広大なもので、その範囲は泉南市男里を中心として樽井、馬場、幡代地番にまで及んでいる。現在までにおこなわれた幾多の調査により、縄文晩期から近現代まで連綿と続く遺跡であることが、明らかになっている。またその秘めたる情報量の豊富さは、この遺跡が泉南地域における歴史を語る上で、非常に重要な位置をしめていることの現れである。

この男里遺跡においては、1975年以降行政機関が中心となり数々の調査が進められ、様々なデータが獲得されている。しかし、それは未だ遺跡の内包している情報の一部にすぎない。今後さらに周辺遺跡との比較検討をおこないながら、問題意識的に調査を遂行していかななくてはならないのである。

さて本年度も上記のことをふまえ、個人住宅建設等に伴う発掘調査を10件おこなった。このうち沖積段丘面縁辺部での調査が半数を占め5カ所（第6～10区）、次いで男里川によって形成された自然堤防上での調査が3カ所（第1・2・5区）、氾濫原での調査が2カ所（第3・4区）となっている。

幡代遺跡は泉南市幡代に所在し、長径650 m、短径400 mの範囲からなる。現在までの調査は少なく十分なデータは与えられていないが、寺院を中心とした平安後期から中近世に至る複合遺跡であることが推定されている。

今回は推定される寺院跡の中心部にあたる所で、個人住宅建設の申請が1カ所上がったため調査を実施した。ごく限られた面積の調査ではあったが、それでも遺跡の内容の一端を垣間見るだけの資料は得られた。

仏性寺跡の調査も同様に多きを数えず、その内容についてはまだまだ不明なところばかりである。しかし、古くより寺院とそれに関連する集落の存在がうかがわれている。この様な状況の下、今年度もただ1カ所ではあるが、遺跡のほぼ中心にあたる位置において、個人住宅建設の申請に伴う調査を実施した。

その結果、寺院に伴うと考えられる整地層の検出や多くの屋瓦が出土し、遺跡の内容の一部を知るに至った。

岡中遺跡はもともと周知されていなかったが、今回の調査により新たに発見された遺跡である。発掘調査と同時に起こった周辺の分布調査の成果と合わせて、その範囲は長径 500 m、短径 300 m となった。

以上の各遺跡における調査地区、位置、申請者、規模、用途、調査年月は第 2 表に一覧したとおりである。

第 1 表 発掘および試掘届出一覧表

63年3月は18日までとする。

| 年 月   | 発 掘 |            | 試 掘 |           | 計   |            |
|-------|-----|------------|-----|-----------|-----|------------|
|       | 件 数 | 面 積 (㎡)    | 件 数 | 面 積 (㎡)   | 件 数 | 面 積 (㎡)    |
| 62. 4 | 3   | 5,738.58   | 0   | —         | 3   | 5,738.58   |
| 5     | 2   | 428.663    | 1   | 1,367     | 3   | 1,795.663  |
| 6     | 4   | 820.79     | 1   | 37,787.51 | 5   | 38,608.3   |
| 7     | 9   | 3,948.99   | 0   | —         | 9   | 3,948.99   |
| 8     | 3   | 1,470.24   | 0   | —         | 3   | 1,470.24   |
| 9     | 2   | 383.85     | 1   | 1,216.51  | 3   | 1,600.36   |
| 10    | 3   | 4,619.33   | 4   | 16,672.48 | 7   | 21,291.81  |
| 11    | 4   | 1,147.786  | 0   | —         | 4   | 1,147.786  |
| 12    | 4   | 11,954.57  | 0   | —         | 4   | 11,954.57  |
| 63. 1 | 0   | —          | 3   | 3,095.08  | 3   | 3,095.08   |
| 2     | 6   | 4,822.85   | 0   | —         | 6   | 4,822.85   |
| 3     | 3   | 880.42     | 3   | 3,106.78  | 6   | 3,987.2    |
| 計     | 43  | 36,216.069 | 13  | 63,245.36 | 56  | 99,461.429 |

第 2 表 発掘調査一覧表

| No | 遺 跡 名 | 地区名  | 位 置  | 申 請 者 | 面 積 (㎡) | 用 途   | 調査年月      |
|----|-------|------|------|-------|---------|-------|-----------|
| 1  | 男里遺跡  | 第1区  | 男里   |       | 99.33   | 住宅新築  | 62年11月    |
| 2  | 男里遺跡  | 第2区  | 男里   |       | 259.39  | 住宅増築  | 62年11月    |
| 3  | 男里遺跡  | 第3区  | 男里   |       | 391.95  | 住宅新築  | 62年5月     |
| 4  | 男里遺跡  | 第4区  | 男里   |       | 106.00  | 住宅新築  | 62年9月     |
| 5  | 男里遺跡  | 第5区  | 男里   |       | 1,367   | 擁壁工事  | 62年8月     |
| 6  | 男里遺跡  | 第6区  | 馬場   |       | 173.180 | 住宅新築  | 62年4月     |
| 7  | 男里遺跡  | 第7区  | 馬場   |       | 298.36  | 倉庫新築  | 62年8月     |
| 8  | 男里遺跡  | 第8区  | 馬場   |       | 277.85  | 事務所新築 | 62年9月     |
| 9  | 男里遺跡  | 第9区  | 男里   |       | 377.663 | 住宅新築  | 62年6月     |
| 10 | 男里遺跡  | 第10区 | 馬場   |       | 310.33  | 住宅新築  | 62年7月     |
| 11 | 幡代遺跡  | —    | 幡代   |       | 441.40  | 住宅新築  | 62年5月     |
| 12 | 仏性寺跡  | —    | 信達市場 |       | 370.936 | 住宅新築  | 62年11,12月 |
| 13 | 岡中遺跡  | —    | 岡中   |       | 388.98  | 住宅新築  | 62年12月    |

第3表 試掘および分布調査一覧表

| No. | 遺跡名 | 位 置  | 申 請 者 | 面積( $m^2$ ) | 用 途        | 調 査 年 月 日 | 備 考                             |
|-----|-----|------|-------|-------------|------------|-----------|---------------------------------|
| 1   | 範囲外 | 男里   |       | 1367        | 倉庫         | 62年 5月12日 | トレンチ5カ所設定。土師器、磁器、蛸壺、瓦片などが出土。    |
| 2   | 範囲外 | 北野   |       | 37787.51    | グラウンドおよび倉庫 | 62年 8月27日 | トレンチ5カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は検出できなかった。 |
| 3   | 範囲外 | 樽井   |       | 1216.51     | 出張所        | 62年 8月 3日 | トレンチ2カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は検出できなかった。 |
| 4   | 範囲外 | 樽井   |       | 9963        | 分譲住宅       | 62年10月28日 | 遺構、遺物、遺物包含層は検出できなかった。           |
| 5   | 範囲外 | 樽井   |       | 4395.86     | 病院         | 62年10月30日 | 遺構、遺物、遺物包含層は検出できなかった。           |
| 6   | 範囲外 | 新家   |       | 1925.14     | 作陶および焼成場   | 62年10月29日 | 遺構、遺物、遺物包含層は検出できなかった。           |
| 7   | 範囲外 | 信達岡中 |       | 388.98      | 個人住宅       | 62年12月 8日 | トレンチ1カ所設定。土師器皿などが出土。遺物包含層も確認。   |
| 8   | 範囲外 | 樽井   |       | 970.93      | マンション建設    | 63年 1月18日 | 遺構、遺物、遺物包含層は検出できなかった。           |
| 9   | 範囲外 | 樽井   |       | 673.25      | ビル建設       | 63年 2月 1日 | 遺構、遺物、遺物包含層は検出できなかった。           |
| 10  | 範囲外 | 樽井   |       | 1450.90     | 倉庫および事務所建設 | 63年 2月 4日 | トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は検出できなかった。 |

第4表 立会調査一覧表

| No | 遺 跡 名       | 位 置   | 申 請 者 | 面積(㎡)  | 用 途        | 調 査 年 月 日 | 備 考                      |
|----|-------------|-------|-------|--------|------------|-----------|--------------------------|
| 1  | 男 里 遺 跡     | 男里    |       | 51     | 農業水路       | 62年 5月 8日 | 断面観察を行なったが、包含層は確認できなかった。 |
| 2  | 男里遺跡近接地     | 男里    |       | 211.75 | 住宅新築       | 62年 6月10日 | 遺構、遺物等は確認できなかった。         |
| 3  | 男 里 遺 跡     | 馬場    |       | 0.35   | 電柱立替       | 62年 7月28日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 4  | 男 里 遺 跡     | 馬場    |       | 0.79   | 電柱立替       | 62年 8月10日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 5  | 男 里 遺 跡     | 幡代    |       | 1.0    | 電柱立替       | 62年 6月18日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 6  | 男 里 遺 跡     | 男里    |       | 0.2    | 電柱立替       | 62年 7月20日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 7  | 男 里 遺 跡     | 男里    |       | 3.94   | 電柱立替       | 62年 8月21日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 8  | 一 丘 神 社 遺 跡 | 信達大苗代 |       | 0.4    | 電柱立替       | 62年 7月27日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 9  | 男 里 遺 跡     | 男里    |       | 4.0    | 鉄蓋取替え      | 62年 8月 5日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 10 | 海 会 寺 跡     | 信達大苗代 |       | 4.0    | 鉄蓋取替え      | 62年 7月31日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 11 | 男 里 遺 跡     | 男里    |       | 1.84   | 電柱立替       | 62年 9月14日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 12 | 男 里 遺 跡     | 男里    |       | 101.4  | 水道管埋設      | 62年11月13日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 13 | 男 里 遺 跡     |       |       | 1.4    | 電柱立替       | 62年12月15日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 14 | 海 宮 宮 池 遺 跡 | 信達大苗代 |       | 288.54 | 住宅新築       | 62年 2月13日 | 遺物包含層を確認。炭片、土師器を含む。      |
| 15 | 幡 代 遺 跡     | 幡代    |       | 0.7    | 電柱移設       | 63年 1月20日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 16 | 高 田 山 古 墳 群 | 幡代    |       | 281.01 | 住宅新築       | 63年 1月13日 | 遺物、遺物包含層は確認できなかった。       |
| 17 | 新 家 古 墳 群   | 新家    |       | 214.98 | 住宅新築       | 63年 1月22日 | 旧地形は削平され、遺物、遺物包含層確認できず。  |
| 18 | 男 里 遺 跡     | 男里    |       | 491.96 | 上水道管敷設舗装復旧 | 63年 2月 8日 | 盛土の範囲で工事終了のため、遺物等は検出できず。 |
| 19 | 滑 瀬 遺 跡     | 信達金熊寺 |       | 800    | 道路         | 63年 3月 8日 | 遺構、遺物は、認められない。           |
| 20 | 林 昌 寺 跡     | 信達岡中  |       | 1.05   | 電柱立替       | 63年 2月16日 | 瓦片が出土。遺構は小面積のため確認できず。    |

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

男里遺跡に関する調査の歴史は永い。古くは昭和5年より現在にいたるまで断続的に調査がおこなわれている。そのうち近年の調査を中心に概観していきたい。

A地点の調査では滋賀里Ⅲ～Ⅳ型式の時期の縄文土器が出土し、男里遺跡の初源がこれまで知られていた弥生前期からさかのぼり、縄文晩期にもとめられることが判明した。現在のところ縄文土器が出土するのは当地点に限られる。

弥生時代については、双子池の南方で遺物包含層が検出されてきた。その状況は現在もかわりなく、弥生集落は池の南に広く展開することが予想されてきた。近年の調査ではこの予想を裏付けるように、B地点で弥生時代中期に属する木棺墓が数基、また西へ数十mはなれたC地点からは同じく中期の竪穴住居跡がみつまっている。どちらも小規模の調査で範囲が確認されていないものの、男里遺跡で弥生時代遺構がしられるのは現在のところこの2地点のみで、集落ばかりでなく墓地までもその存在が確認されたことの意義は大きい。今後集落と墓地それぞれの範囲確認、およびこの集落をささえる生産基盤の発見が期待されるものである。

時代が下ると双子池上池周辺から古墳時代遺物が発見されているが、古墳時代においても弥生時代以降集落の位置は大きく変化していないことがうかがえる。またD地点からは奈良および平安時代の掘立柱建物が検出されている。

中世の遺構は、E地点から鎌倉時代の掘立柱建物が3棟検出されている。遺物は遺跡内のほぼ全域で確認され、中世の頃には遺跡全体に生活活動の場が求められたことがわかる。ただし遺構が確認されるのは、現在も男里集落が立地する男里川の自然堤防上に限られるようである。

F～Hの各地点では、それぞれ黒褐色土層が確認されている。この層自体に遺物は含まれないため正確なことはいえないが、必ず中世遺物包含層の下層に位置するため、中世以前に形成されたものであることはまちがいない。男里川

旧河道が運搬した肥沃な土壌を利用した古代の耕作地の可能性があろうか。

このように時代別に遺跡内での遺構・遺物の検出された状況をみてきたが、現在のところ縄文時代では遺跡の北部、弥生時代では双子池の南方、古墳時代および奈良平安時代にかけては双子池の周辺、中世以降は遺跡内全体（ただし遺構検出は遺跡の北東、自然堤防上に限って）にそれぞれの時代の生活活動の場を求めることができるようである。

以上小規模な調査の連続ではあるが、データが着実に蓄積されてきたことにより、ここ数年で遺跡の南限は約 200 m 南へ拡大することができた。当地域における人々の足跡の初源も縄文時代にさかのぼることが知られた。しかし、現段階では広範な遺跡内に点をプロットしたのみという感はまぬがれない。以前から指摘されている、集落の自然堤防上への遷移時期、男里川旧河道の位置追及などの問題も含め、これらの「点」の集積を「面」そして「空間」へと再構成していく作業が必要とされる時期がきているのである。

## 第2節 第1区の調査

### 1. 位置（PL.2、第1図）

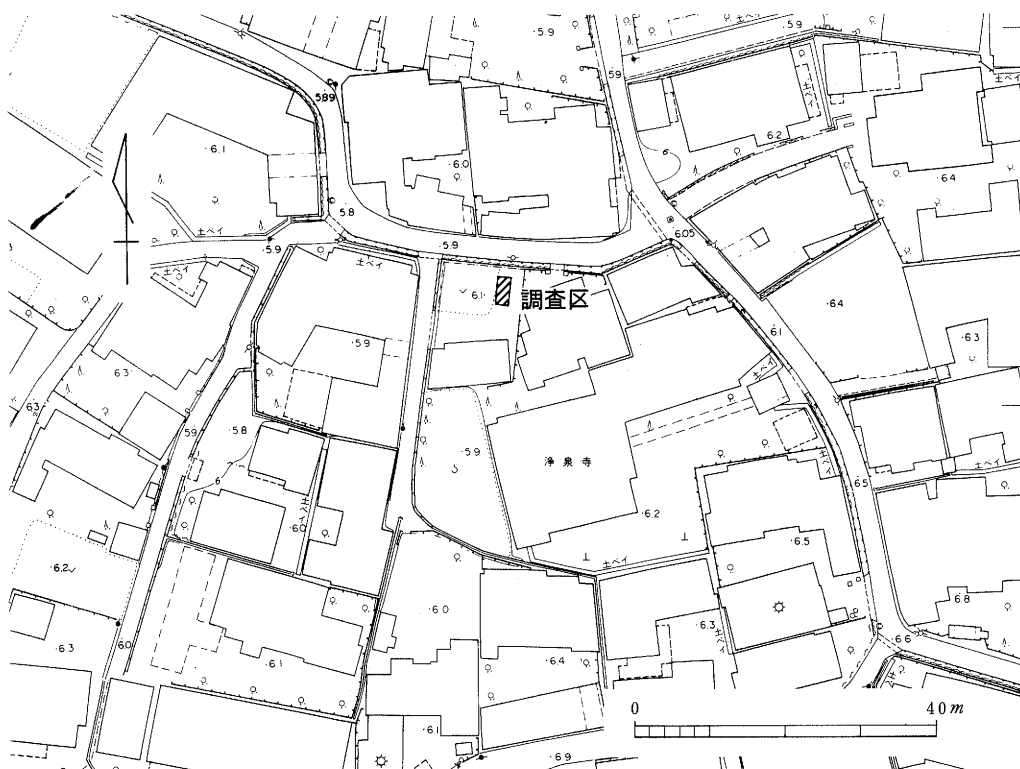
第1区の男里1245－1番地は、男里遺跡の北西部にあたり、現在の浄泉寺の北側に位置する。地形分類上は男里川右岸の自然堤防上に位置している。これまで男里遺跡内でも比較的調査は多くおこなわれていたにもかかわらず、既知の遺構が希薄だった部分である。

調査区北東端に 3.6 m × 1.4 m の南北トレンチを設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL.3）

基本的な層序は上層より盛土、炭細片を含む灰褐色土、拳大の礫を多く含む黄灰色土、やや粘質の灰褐色土、黄灰色粘土、そして暗灰褐色砂礫土の地山と続く。地山に含まれる礫は直径 1 cm 以下のものである。

遺物は唯一の遺構である土坑より出土した一括遺物が、本調査区出土遺物の大半を占める。また、土坑の直上にかぶさるように存在した黄灰色粘土層より、



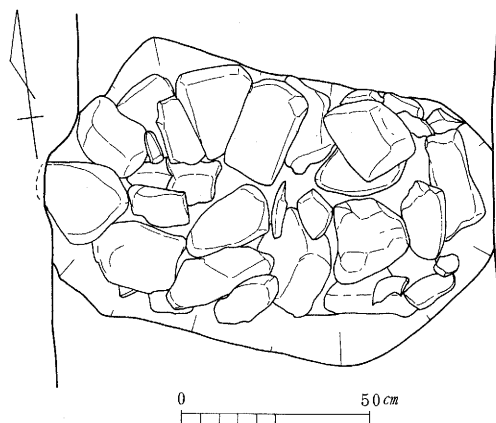
第1図 男里遺跡第1区地形図

瓦片とともに土師器小皿3点がまとまって出土している。このほか黄灰色含礫土より平瓦、粘質灰褐色土からは丸瓦細片、土師器細片がごくわずかだが出土している。

### 3. 遺構（PL.3、第2図）

土坑は平面楕円形を呈し、地山に深く掘りこまれている。底は平坦な面をなし、壁面は垂直に立ち上がる。またその長軸方向はほぼ東西に向けられている。規模は長径1.2m、短径0.8m、深さ45cmを測る。

内部にはてのひら～人頭大の河原石が約60個充填されており、土坑の肩にはりついたように並んでいる部



第2図 男里遺跡第1区土坑

分もみられる。これらの石群は、土坑上半に密にみられ、下半では疎である。底にはやや平らな石や瓦を部分的に敷いている。これら石群の大半は火をうけて焼けているが、土坑の壁面には火をうけたような箇所は認められない。埋土は暗褐色粘土である。炭や焼土は含まれない。

遺物は上半にはほとんど存在せず、もっぱら下半より出土した。特に銭貨は3枚が重なるように1カ所より出土し、まとめて埋納された状況が伺える。瓦類は大半が土坑の底部付近に集中していた。

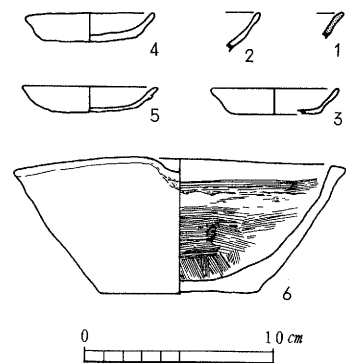
#### 4. 遺物（PL. 7、第3・4図）

遺物は土坑内より、土師器、瓦器、瓦質こね鉢、玉縁丸瓦、雁振瓦、銭貨等が、黄灰色粘土層からは土師器・小皿がそれぞれ出土した。

##### A. 土坑出土の遺物

6は瓦質こね鉢である。内面は全体に粗いハケ調整の後、口縁部内面には指頭による2条の強いヨコナデが施される。外面は剝離部分が多く、最終的にナデで仕上げられていることがわかる程度である。ただ口縁部外面にはやはり1条の強いヨコナデが施されている。口縁端部は平坦な面を持ち、内外面との境は丸く仕上げられる。片口部は調整がすべて終わったあとで内側より外方向へ指先で押し出して成形されている。焼成は良好で硬質、色調はやや光沢をもつ淡灰色を呈す。胎土は精緻で砂粒等は含まない。この他土坑より出土した土師器、瓦器はみな細片ばかりで図化できるものはまったくなかった。

3・5は玉縁丸瓦である。凸面は側面に条が平行する縄タタキの後、縦位のヘラケズリで形を整え、最後にナデ調整で仕上げている。端面及び側面はすべてヘラケズリが施される。端縁、側縁ともにヘラケズリで面取りがされている。また凹面端縁、すなわち玉縁とかさなる部分はヘラケズリによるエグリが施され、玉縁とのおさまりをよく



第3図 男里遺跡第1区  
出土の土器

している。

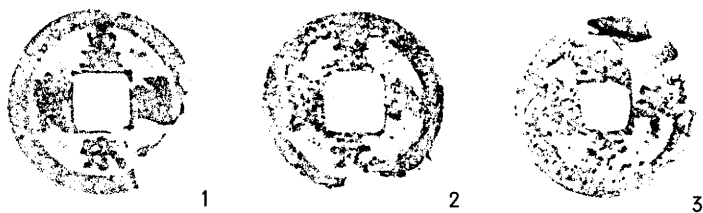
凹面には糸切り痕が全面に認められるが、布目圧痕より経緯糸が15条×10条(4)、23条×22条(3・5)の2種類にわけられる(前者をA型式、後者をB型式と呼称する)。A型式は胎土に径1mm以下の白色および黒色の鉱物が非常に多く含まれている。またB型式には有色鉱物の微細粒こそあまり含まれないものの、径1mm程度の暗灰色クサリ礫が多く含まれるという特徴を示している。両型式ともに焼成は良好で硬質、色調は暗灰色を呈している。

この3点の他に図化できなかったものを含めると、A型式2点、B型式3点、合計5点以上の丸瓦が土坑底部より出土している。

6・7は雁振瓦である。高く盛り上がった瓦部に玉縁部がつく。凸面は摩滅のため詳細はわからないが、縦位のヘラケズリが丁寧に施された後、ナデ調整で仕上げられる。凹面は糸切り痕がほぼ全面にのこり、布目圧痕はごく一部にしかみられない。側面、端面ともに丁寧にヘラケズリが施されている。面取りがみられるのは凹面側の側縁のみである。また凹面の玉縁と重なる部分は、ヘラケズリで大きくえぐられている。玉縁は、凹凸面および端面すべてヘラケズリが施されている。2点ともに胎土には径1mm程の赤色クサリ礫、白色及び黒色の有色鉱物が多く含まれている。焼成はあまく軟質、色調は淡橙灰色で部分的に黒斑がある。

雁振瓦は2点とも土坑の下半より出土しており、底部から集中して出土した玉縁丸瓦とは出土状況は異なっている。

銭貨は土坑西半部より銅銭3点がほぼ重なるように出土した。1は皇宋通宝、2・3はどちらも判読は難しいが宋銭と考えられる。3点とも残存状況は悪く、腐食が進んでいる。



スケール 1:1

第4図 男里遺跡第1区土坑出土の銭貨

## B. 包含層出土の遺物

土坑直上の黄灰色粘土から、土師器・皿・小皿、瓦器が出土している。

1は瓦器口縁部である。内面には暗文が1条残っている。焼成は良好で硬質、胎土は緻密なもので、淡灰色を呈す。2は土師器・皿口縁部である。ゆるやかに内彎しながらのびる口縁の外面には2段ナデ、内面にはヨコナデが施される。やや軟質で色調は白色を呈し、胎土は緻密だが黒色鉱物の微細粒がわずかに含まれる。和歌山県根来寺遺跡周辺で出土する、いわゆる白土器に非常に似ている。

土師器・小皿3・5は3点とも同じ形態、胎土、焼成、色調をしめす。わずかに外彎しながら外上方にのびる口縁をもち、口縁端部は丸くおさめる。全体を成形し内面にナデ調整をくわえたのち、口縁部内外面にヨコナデを施す。底部外面は成形時の指オサエがのこる。胎土は精緻、焼成は良好で硬質、色調は黄灰白色を呈す。

平瓦1・2は黄灰色含礫土より出土したものである。どちらも凹凸両面ともにナデ調整で仕上げられる。1には直径1.5 cmの目釘穴がある。2の凸面には離れ砂が残っている。

## 第3節 第2区の調査

### 1. 位置 (PL. 2)

調査区は男里遺跡の北東部にあたり、府道堺阪南線男里交差点より北北西約150 mの地点である。地形分類上では、男里川によって形成された自然堤防上に位置する。また、調査区の北側30 mの位置において、古墳時代後期、平安時代、鎌倉時代の掘立柱建物群に伴うと考えられる掘形が検出されている。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3)

調査区の土層は8層からなり、第1層が盛土で40～45 cm、第2層が黄褐色混じり淡灰色土で5～13 cm、第3層が黄褐色混じり灰色土で約10 cmを測る。灰色混じり黄褐色シルトからなる第4層は、15 cm程の厚みを測る。第5層は部分

的にみられ、黄褐色混じり灰色シルトで約15 cmの厚さを測る。

第6層は親指から拳大程の礫を微量含む黒褐色粘質土が30～38 cm堆積している。第7層は灰黄褐色粘質土からなり20 cm程を測る。第8層は淡灰色粘質土で20～30 cmを測る。地山は灰色粘土混じり黄褐色礫層で、礫は親指大の円礫を平均とするが、最大で掌大のものを含んでいる。

なお、今回の調査区内においては、遺構および遺物を確認することはできなかった。

#### 第4節 第3区の調査

##### 1. 位置(PL・2)

第3区は、男里遺跡の北半部を北東から南西方向に横切る府道堺阪南線よりさらに北側で、男里北交差点から北北西に約175 mの地点にあたる。この箇所は地形分類上で氾濫原および谷底低地に位置する部分である。

なお、これより東北東約110 mの地点には第4区が位置している。

##### 2. 層位と遺物の出土状況(PL・3)

本調査区の土層は大別して、6層からなっている。まず第1層はこの度の住宅建設に伴い施された盛土で、65 cmの厚さを測る。第2層は、暗灰色土(耕土)であるが、5 cmと非常に薄い。これは第1層(盛土)を施す時点で大きく削平されているからであって、本来は20 cm程の厚さをもつものである。第3層は灰黄色土(床土)で5 cm、第4層は黄灰色土で10 cmを測る。

第5層は灰色粘質土からなり、30 cmと他に比べ厚い堆積である。最後に第6層であるが、暗灰色粘質土で5 cm程を測る。地山は淡灰色礫層で、礫は小指から拳大の円礫で形成されている。

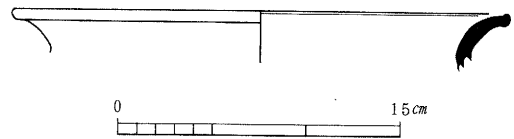
遺物は第4層より瓦器・碗の細片が1点であるが出土している。また、第5層より須恵器・甕が1点出土した。なお遺構は検出されなかった。

### 3. 遺物（第5図）

今回の調査で出土した遺物は非常に少なく、先述のごとく須恵器・甕が1点と瓦器・碗の細片が1点出土したのみである。図示した須恵器・甕は、所謂東播磨系のものであるが、口縁部のみの破片でその全形は知り得ない。残存する口縁部はゆるやかに外反し端部に至る。端部はほぼ平坦で上方にややつまみあげている。

内外面ともヨコナデを施すが、外面において部分的に右上がりの平行タタキ痕が残っている。胎土は砂礫をほとんど含まず精良である。焼成は堅緻で暗青灰色を呈する。口径は26 cmを測る。

瓦器・碗は器壁の摩滅が著しい体部の破片で、形態および調整などの詳細はまったく不明である。



第5図 男里遺跡第3区出土の土器

## 第5節 第4区の調査

### 1. 位置（PL. 2）

男里遺跡の北端近くに位置している。調査区は男里川旧河道の存在が想定されている付近にあたり、旧河道が形成した氾濫原上に立地している。

調査は、調査区南端に2.3 m × 1.2 mのトレンチを設定しておこなった。なお現在の地番は男里378-6番地である。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 3）

基本的な層位として、盛土の下層に耕土、床土が残っており、以下黒褐色粘土、黒褐色砂礫土、茶灰色砂礫土がみられた。黒褐色粘土は約10 cmの厚さをはかり、部分的に拳大のクサリ礫を含む。黒褐色砂礫土には拳～人頭大の砂岩円礫、茶灰色砂礫土には直径5 cm大の砂岩円礫をそれぞれ含んでいる。黒褐色粘土層はこれまでの調査によって知られている、遺跡北東部に広がる一連の黒褐色土層と同じものである。

遺構・遺物・遺物包含層等はまったく認められなかった。

## 第6節 第5区の調査

### 1. 位置 (PL. 2)

調査区は遺跡の西部、光平寺跡の南端に接するように位置する。男里川右岸の自然堤防上に立地する。現在はカスミ堤と男里川堤防の間に挟まれた低地となっている。トレンチは事前におこなわれた試掘調査で遺物が出土した地点に2カ所設定した。第1トレンチは3.5 m × 1.8 m、第2トレンチは8 m × 3 mの長方形を呈す。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3)

第1トレンチでは、床土の下層に1層としてとらえられる灰色系土が30 cmの厚さに堆積しており、これより下に親指～てのひら大の礫からなる暗灰色礫層、黄灰色粘土、褐色混じり灰色粘土、灰色混じり黄色粘土、黄色混じり褐灰色粘土がみられた。おおむね礫層の上層には灰色系土、下層には粘土が堆積しているという状況が看取できる。

第2トレンチでは耕土、床土の下に褐色混じり暗茶灰色土、黄灰色土、褐色混じり灰白色粘土、淡黄灰色礫（地山）が基本的な層序としてみられた。淡黄灰色礫層に含まれる礫は径3 cmからてのひら大の砂岩円礫である。

### 3. 遺構 (PL. 3)

調査の北端に設定した第1トレンチでは、調査区外にひろがる落ち込みが検出された。このほか地山面直上に炭の小片が部分的にみうけられたが、明確な遺構としては確認できなかった。

第2トレンチからは遺構はまったく検出されなかった。

### 4. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、染め付け・椀、丸瓦片、土師質蛸壺である。どれも皆摩滅が著しい細片ばかりで、図化にたえうるものはなかった。

丸瓦片が数点みられるが、すぐ北方に位置する光平寺に関係するものであろ

うか。

## 第7節 第6区の調査

### 1. 位置 (PL. 2)

男里遺跡のほぼ中央東よりに位置している。ちょうど沖積段丘の西縁辺にあたり、現在西側には数十cmの落差があり男里川氾濫原が広がっている。

調査は申請地のほぼ中央に1m×2.3mの調査区を設定して行った。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4)

50cm余りの盛土を取り除くと、黒灰色土層(耕土)、明黄色粘土層(床土)、淡褐色礫層がみられた。層厚はそれぞれ、20cm、6cm、60cm以上を測る。淡褐色礫層は最大人頭大の砂岩河原石が含まれている。

遺物・遺構は検出されなかった。

## 第8節 第7区の調査

### 1. 位置 (PL. 2)

本調査区は男里遺跡のほぼ中央に位置する上池の北東隅部分から東に約220mの地点で、遺跡の中央東端部にあたり、沖積段丘面の縁辺に立地する。

なお第6区とは35m、第8区とは50mの指呼の間にある。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4)

調査区における基本的な土層は5層からなっている。まず第1層は盛土で約50cmを測る。第2層は暗灰色土(耕土)で25cm、第3層は黄灰褐色土(床土)で5cmの厚みを測る。第4層は約7cmの厚みからなる灰褐色土である。第5層は褐色土で15cmを測る。遺物は第5層より土師器の細片が少量出土しているが、著しく摩滅しており全貌はまったく不明である。

地山は褐色混じり黄色土を呈し、遺構はすべてこの面で検出された。

### 3. 遺構（PL・4・14）

地山面において検出された遺構は、ピット1カ所と溝1条である。ピットは全体を検出していないものの、一辺55cmの隅丸方形を呈するものとして間違いないと思われる。上面は溝によって削平されているが、残存する深さは35cmを測る。埋土は褐色土からなる。

なお、柱痕は確認されなかったものの、その形態等より建物掘形と考えると差しつかえないと思われる。また、遺物は検出されず時期は不明としか言い様がないが、これもまた形態からして、奈良時代の所産となる可能性が強い。

溝は北北西から南南東にほぼ直線的にのびるもので、長さ3.6m以上、幅0.8m以上を測る。深さは15～20cmを測り、肩は比較的ゆるやかで底部はほぼフラットである。また溝底部は、北北西側にやや低く傾斜している。溝内の埋土は淡褐色土からなる。なお、遺物はまったく出土していない。

## 第9節 第8区の調査

### 1. 位置（PL・2）

男里遺跡の東端に位置し、地形分類上は、馬場丘陵の西に広がる沖積段丘面上に立地する。現在の地番は馬場472－1番地である。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL・4）

耕土・床土を除くと上より順に黄褐色土、暗褐色土、黄灰色土、暗茶褐色土が続く。暗褐色土には直径5mm大の円礫を、暗茶褐色土には拳大の円礫を多く含んでいた。唯一遺構かとおもわれる落ち込みは、床土直下の黄褐色土層を切り込んでいる。なお遺物はまったく出土していない。

男里遺跡の東北に広範に広がる黒褐色土層の分布について、以前の調査で北へ50m程の地点（先述H地点）より黒褐色土層が確認されているにもかかわらず、本調査では発見できなかった。黒褐色土層が部分的な分布を示すものでなく、ある程度の範囲にまとまって分布するものと仮定するならば、両調査区の間はその分布範囲の南端を求めることができるものである。

### 3. 遺構（PL. 4）

黄褐色土面より不定形の落ち込みが検出された。埋土は暗灰褐色土である。床土の直下層という非常に浅い面で検出されていることから、床土を張る以前の整地の不整であるかもしれない。規模は楕円形となるなら、長径 1.5 m 以上、短径 0.8 m 以上、深さ 20cm を測る。

## 第10節 第9区の調査

### 1. 位置（PL. 2）

第9区は男里遺跡の西端付近に位置する。地形的には馬場丘陵の西側に広く展開する沖積段丘面上に位置している。現在の馬場集落の西部にあたる。

調査は調査区の西北端付近には 3 m × 1.5 m のトレンチを設定して行った。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4）

基本的な層序は、3層からなる盛土が約 50 cm ほど置かれ、上より順に暗灰色含礫土、暗黒灰色シルト、青灰色混じり黄色粘土、赤褐色含礫土が続く。暗灰色含礫土に含まれる礫は直径 5 cm 以下のものが多い。また青灰色混じり黄色粘土はややシルト質に近く地山と考えられる。これより下層にみられる赤褐色含礫土は最大人頭大の河原石を含んでいた。遺物包含層は認められない。

## 第11節 第10区の調査

### 1. 位置（PL. 2）

本調査区もまた第6～9区と同様、沖積段丘面上に立地する。調査区のすぐ東側には市道がほぼ南北に走るが、これより東には現在の馬場の集落が展開している。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4）

調査区の土層は大別すると3層からなる。まず第1層は盛土で 35 cm を測り、

第2層は淡褐色土で 20 cm、第3層は淡褐色含礫土で 30 cmの厚みを測る。

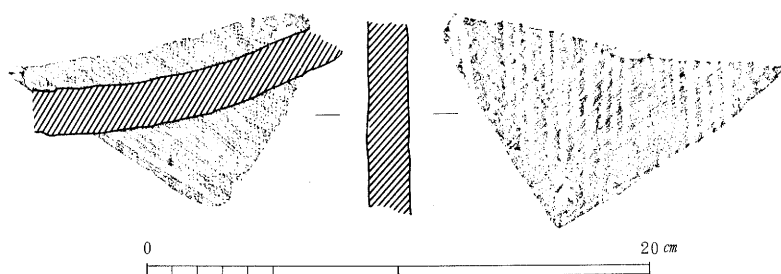
遺物は第2層より土師器微細片および平瓦が1点出土している。

なお遺構は検出されなかった。

### 3. 遺物（第6図）

出土した遺物は、非常に少なく摩滅が激しく観察不可能な土師器微細片と平瓦が1点出土したのみである。

図示した平瓦は、凸面に側縁と平行な縄タタキを施し、多量の離れ砂が残る製品である。凹面には布目痕が残る。また両面に糸切り痕が確認できる。焼成は堅緻で青灰色を呈する。胎土は直径1～3 mm程の礫を含むが、全体的にはきめ細かいものである。厚さは1.6～1.9 cmを測る。



第6図 男里遺跡第10区出土の平瓦

### 第3章 幡代遺跡の調査

#### 第1節 既往の調査（第7図）

幡代遺跡における発掘調査は、現在まではほとんど行なわれておらず、昭和59年1～3月に大阪府教育委員会が、遺跡の西端を北北西から南南東方向に走っている市道下において、府水道管を埋設する際に事前調査を実施しているのみである。

3カ所の地点（以下B・C・D地点と呼ぶ）で実施されたこの調査では、B地点において掘立柱建物に伴う可能性が非常に強い柱掘形列が、またC地点でも建物掘形状のピットが確認されている。いずれも時期は明確に確定出来ないものの、遺構面上層に堆積している平安時代後期から室町時代に至る遺物包含層の存在から、当該時期の所産であることが推測されている。

D地点では、金熊寺川の氾濫による多量な礫の堆積が確認されている。<sup>(註)</sup>

また地元の向井俊生女史らにより、平安時代後期から室町時代の軒瓦・丸瓦・平瓦などが表採されている。その採集地点はC地点東側の水田と、それより北へ約200m、つまり遺跡の北側を北東から南西方向に走る国道26号線付近である。

幡代遺跡における既往の調査は以上のごとくで、遺跡の内容を究明するには決して十分なデータとは言いがたいが、平安時代後期に創建されたと思われる寺院および、それに関連する集落の存在が十分推測されるに至っているものである。

なお、B地点の北側約100mの位置（A地点）においても、B・C地点と同様の柱掘形が検出されている。

この地点は分布図上では男里遺跡内にあたるが、遺構等の性格から幡代遺跡に属するものとして、とらえた方が良いと思われる。

## 第2節 調査の成果

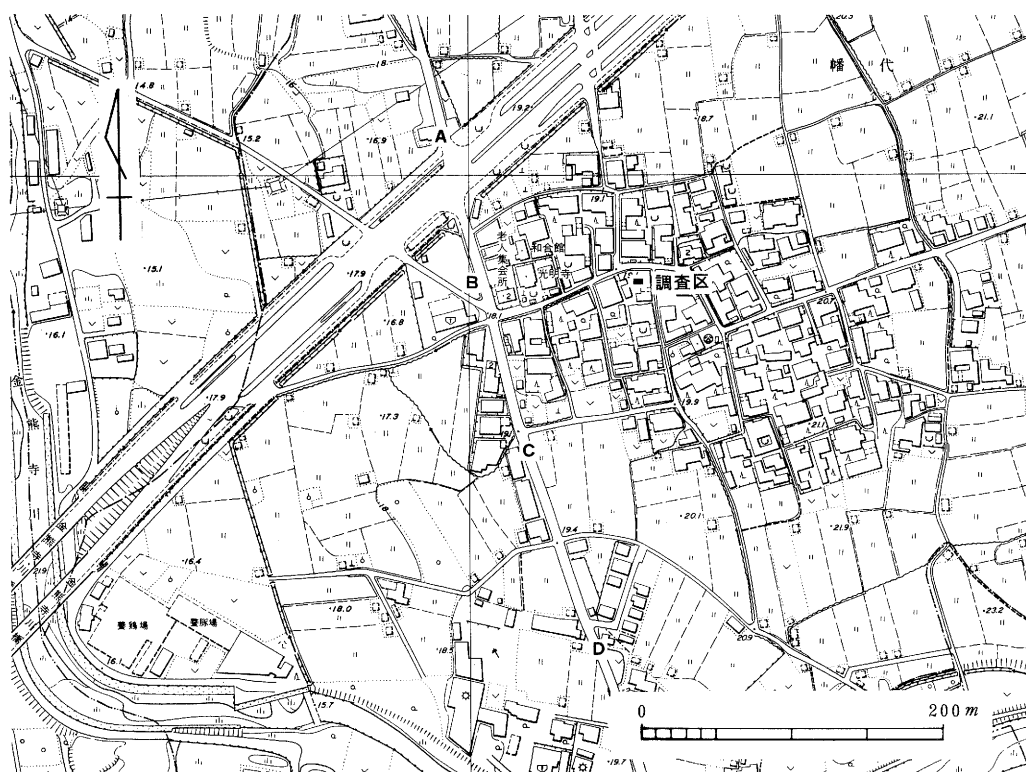
### 1. 位置 (PL. 2)

調査区は、男里遺跡と幡代遺跡とを限る国道26号線の幡代交差点中心より、南東へ約 140 m 地点で、現在の幡代集落のまっただ中に位置し、地形分類上は沖積段丘面に立地する。なお、昭和59年大阪府教育委員会が調査し、掘立柱建物の柱掘形を検出した B 地点とは約 110 m の距離を測る。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4)

調査区の土層は6層からなり、まず第1層が盛土で14 cm、第2層が淡灰褐色土で14～18 cmを測る。第3層は淡黄色土で3 cm程の厚みをもつのみである。灰褐色土からなる第4層は約6 cmの厚みを測る。第5層は濃灰色土で28 cmと比較的厚く堆積している。第6層は灰褐色粘質土からなり18 cmを測っている。

遺物は第5層より土師質土器・甕、平瓦、丸瓦が、第6層より須恵器・甕、



第7図 幡代遺跡調査区位置図

瓦器・椀、瓦質土器・播鉢・土釜、平瓦、丸瓦、壁土などが少量出土している。

なお地山は黄褐色土からなっている。

### 3. 遺構（PL. 4・16）

調査面積が小さいため全貌は不明であるが、溝らしき遺構の一部が検出された。

溝は北東から南西方向に主軸をもつもので、黄褐色土からなる地山面に掘り込まれている。深さは25cm程を測るが、幅については全体のプランが不明なため1.8m以上を測るとしか言い様がない。肩は比較的緩かで底部はほぼフラットである。また溝底部は僅かであるが、北東方向に低く傾斜している。

溝内の埋土は4層に分かれ、第1層が濃灰褐色粘質土、第2層が濃褐色粘質土、第3層が灰色粘質土、第4層が褐灰色粘質土を呈する。溝内から遺物はまったく検出されなかったが、第2層から第3層にかけて掌から人頭大の河原石の混入がみられた。

以上、溝として説明を加えてきたが、いかんせん一部分のみの検出であり、決定はしがたい。

### 4. 遺物（PL. 22、第8・9図）

出土した遺物は少量であり、なおかつ全貌を知り得るものはない。遺物の種類を列記すると次の通りである。須恵器・甕、瓦器・椀、瓦質土器・播鉢・土釜、土師質土器・鍋・甕、備前焼・甕などの日常雑器の他、平瓦、丸瓦、壁土等がみられる。

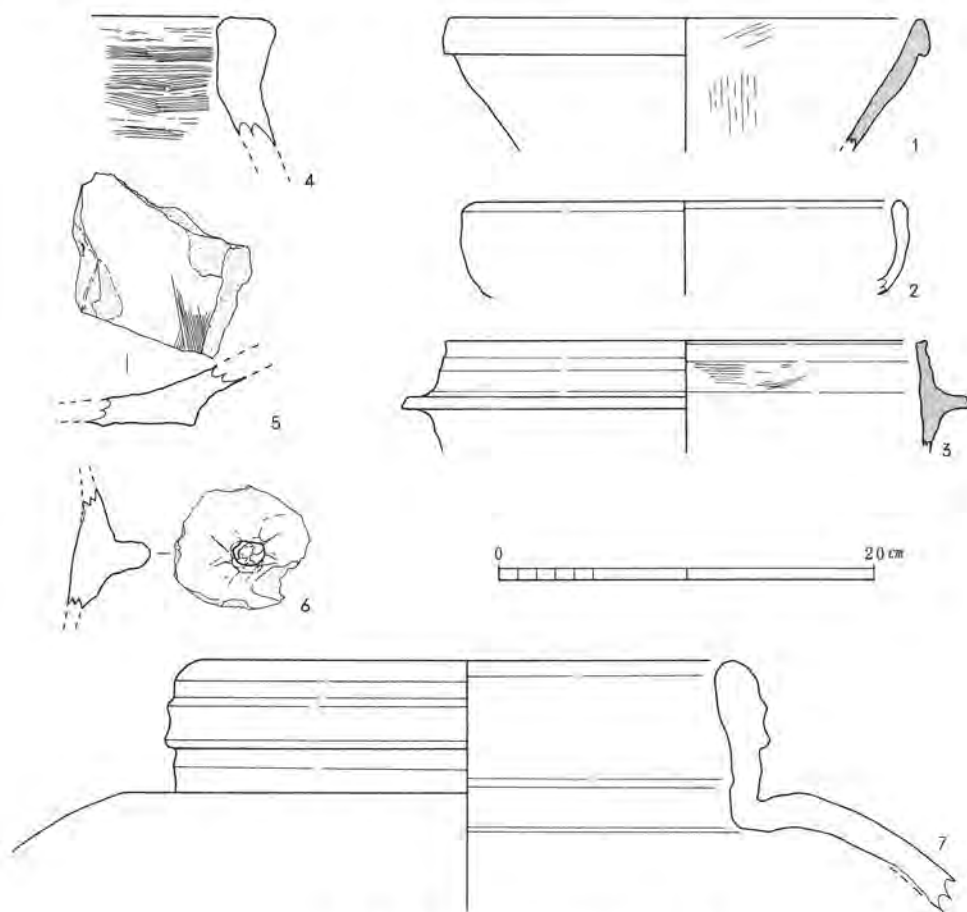
須恵器・甕は体部の小片で図示し得なかったが、所謂東播磨系と呼ばれる土器である。内面の調整については摩滅のため不明であるが、外面には平行タタキが施されている。胎土は砂礫をほとんど含まない精良なものである。焼成は堅緻で暗青灰色を呈する。

瓦器・椀も同様に体部の小破片が1点出土しているのみで、図示し得なかった。内面はナデの後、暗文を施しているが、いかんせん小破片のためよくわからない。外面は不調整で成形時の指頭圧痕をそのまま残す。焼成は軟質で黒灰色を呈する。胎土は砂礫をほとんど含まないきめ細かなものである。

瓦質土器・擂鉢は、図示した1点のみの出土である。1は底部を欠いた口縁部から体部にかけての破片で、全体の形態は不明である。体部は斜め上方にのび口縁部に至る。口縁部は外傾面を有し断面三角形を呈する。外傾面の下端部は下方に突出している。調整は口縁部の内外面にはヨコナデを施すが、体部外面はヘラケズリをおこなう。

体部内面は横方向のハケ調整の後、縦方向の擂り目を施している。擂り目の条数は8条以上を数える。焼成は軟質で黒灰色を呈する。胎土は砂粒をやや含むが、精緻な部類である。口径25cmを測る。

瓦質土器・土釜は口縁部の破片が4点出土しているが、図示出来るものは1点のみである。3は礫が多く、赤色粒が少し混入した淡黒灰色を呈すもので、どちらかと言うと土師質に近いものである。



第8図 幡代遺跡出土の土器

口縁部がほぼ直立ぎみに立ち上がり、外面は強いナデにより段が設けられている。鋳はほぼ水平に伸びるものである。口縁端部と鋳端部はナデにより平坦に仕上げられている。口縁部外面および鋳の上・下面はナデ調整が施されている。内面および僅かに残存する体部の外面は、摩滅のため不分明であるが、内面はハケ調整を施した後、ナデている。体部外面はヘラケズリを施す。口径は25cmを測る。

土師質土器・鍋も図示した1点(2)のみである。底部は欠落して不明であるが、体部は内彎ぎみに立ち上がり口縁部に至る。端部は丸くおさめる。内面の調整は横方向のナデをおこなう。外面は全体に煤の付着が著しく調整が明確ではないが、口縁部は横方向のナデ、体部はヘラケズリを施すようである。

焼成は良好で淡赤橙色を呈する。胎土は砂礫および赤色粒を含むが、精緻なものである。口径は22cmを測る。

土師質土器・甕は、おそらく同一個体と思われる口縁部(4)と底部(5)の破片が1点づつ出土している。体部がほとんど欠落しているため詳細は不明であるが、緩かに肩の張る体部に、若干外反する口縁部と、平らな底部がつくものである。口縁部は頸部から上方にいくほど厚く仕上げている。なお端部は平坦面を有する。内面は口縁部および体部上下端とも横方向の粗いハケ調整を施している。

口縁部と体部上端は横方向のナデをおこなっている。底部内面にはナデが施されているが、底部および体部下端の外面は、摩滅が激しく調整についてはまったく不明である。焼成は良好で橙黄色を呈している。胎土は砂礫の混入がやや多い。

6は土師器の把手と考えられるものであるが、どのような器種に伴うものか良く分らない。把手は張りつけによるものであり、接合時にナデ調整を施している。この土器で注目する事実として、内面に残る布目痕があげられる。あるいは型づくりによるものであるかもしれない。焼成は良く淡赤橙色を呈す。胎土は砂粒、赤色粒のほか、金雲母を比較的多く含むが、精緻な部類である。

陶器は図示した備前焼・甕以外に、数点の体部の破片が出土している。これらはすべて同一個体になると考えられるものである。7は肩の張る体部に、やや内彎ぎみに立ち上がる口縁部からなる。口縁部上半は外面に粘土を張り付け

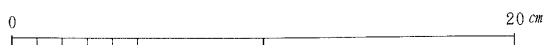
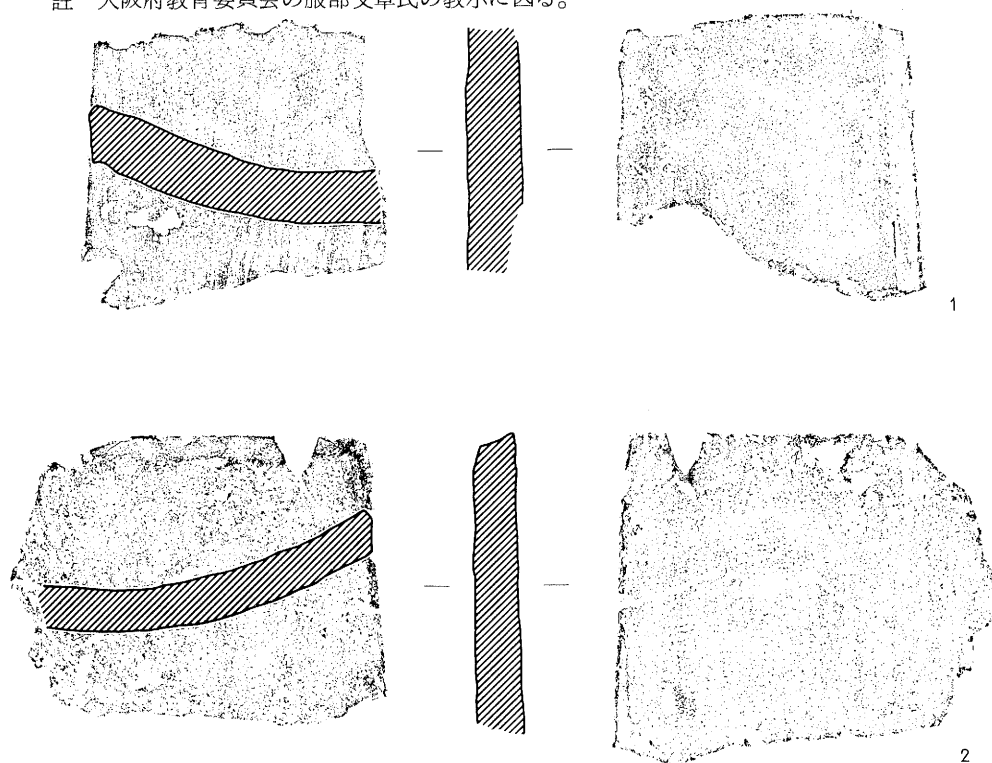
肥厚させ、強い横方向のナデにより段を設けている。口縁部内面はヨコナデ、体部内面は粗いハケの後、ナデ調整を施す。体部外面は自然釉の付着が著しく不分明であるが、ヘラケズリが施されているようである。焼成は堅緻で赤茶色を呈する。胎土は砂礫を少し含むが精緻なものである。口径は28 cmを測る。

平瓦(1・2)はどちらも須恵質の製品で、凸面凹面とも多量の離れ砂が付着している。焼成は堅緻で青灰色を呈す。胎土は1～3 mmの礫をやや多く含むが、堅緻なものである。厚さは1が2.3 cm、2が1.8 cm前後を測る。

丸瓦は小片のため図示出来なかったが、凸面に縦方向のナデを施し、凹面に布目痕を残すものである。焼成は堅緻な須恵質の製品である。胎土は少量の砂礫を含むが、きめ細かいものである。厚さ1.6～1.8 cmを測る。

この他、あたかも意識的に平瓦をうちかいて作ったと思える直径6～7 cmの製品が2点出土している。遊具の一種かもしれない。

註 大阪府教育委員会の服部文章氏の教示に因る。



第9図 幡代遺跡出土の平瓦

## 第4章 仏性寺跡の調査

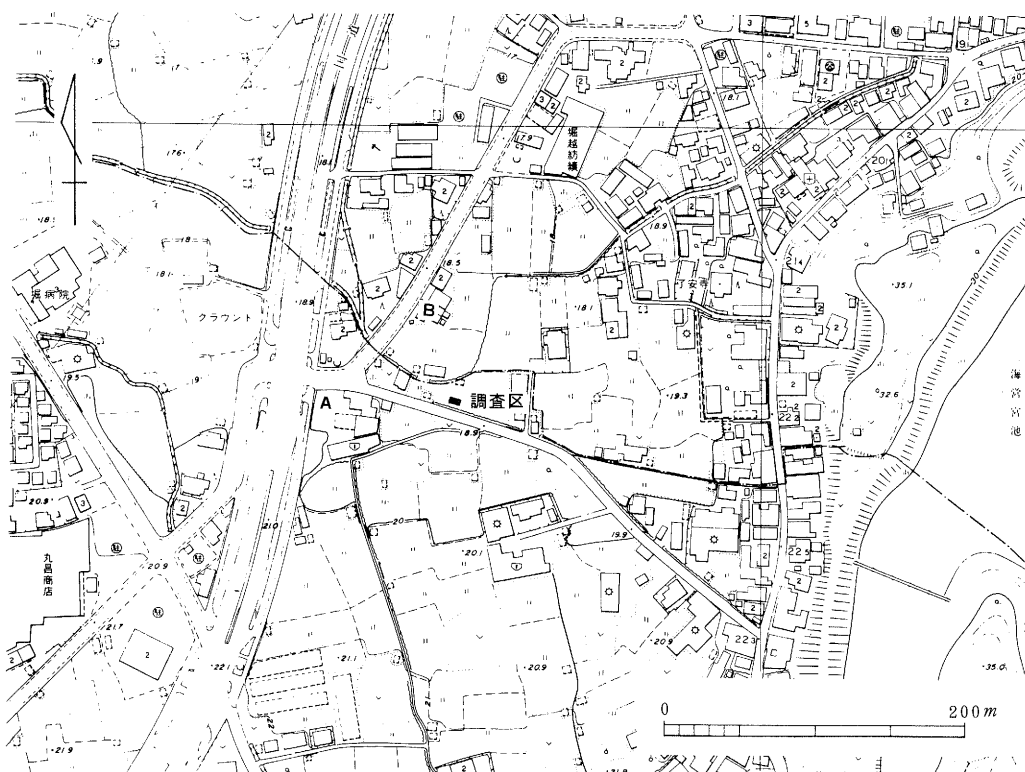
### 第1節 既往の調査

昭和55年の泉南市教育委員会の調査（A地点）により、平安から室町に至る2面の遺構面が確認されているが、直接寺院に關係する遺構はみつかっていない。またB地点の調査では遺構こそ検出されていないものの、瓦器、瓦片が出土している。幡代遺跡と同様、今後の調査の増加を待ちたい。

### 第2節 調査の成果

#### 1. 位置（第10図）

本調査区は、周知されている仏性寺跡のほぼ中心に位置する。地形的には海營宮池の西方約280mの位置で、洪積段丘低位面にあたり、地表面の標高は約18.5mを測る。調査区の現状は休耕地である。地番は信達市場1380-1、小字



第10図 仏性寺跡調査区位置図

名は調査区と道路をはさんで南側の田地が「ヤクシドウ（薬師堂）」、東方に隣接する田地が「ダイモン（大門）」とよばれている。また調査地の西方には隣接して「赤井神社址」の石碑があり、仏性寺は赤井神社の跡地に建立されたものという内容の碑文が刻まれている。

調査は  $5.3\text{ m} \times 3\text{ m}$  のトレンチを設定しておこなった。

## 2. 層位と遺物の出土状況（PL・5）

層厚  $15\text{ cm}$  の耕土、 $10\text{ cm}$  の床土をとり、のぞくと暗灰褐色土が露呈する。基本的にはこれより下層に黒褐色土と淡黄灰色土の軟質互層、暗褐色粘質土が堆積し、淡青灰色砂礫層の地山が続く。遺構が構築されているのは暗灰褐色土層面であるが、これは版築などの技法こそみられないものの、人為的な整地層と考えられる。暗灰褐色土層以下の各層はすべて西南方へむかって傾斜しており、特に暗灰褐色土層の傾斜は急であり、この斜面上には淡灰褐色含礫土、赤褐色粘土の他、礫や瓦の堆積がみられる。便宜上この傾斜を西側斜面と呼ぶことにしたい。

遺構からの出土を除けば、遺物が多く出土するのは地山直上層である暗褐色粘質土からで、湧水層の直下にあたるためか遺物の保存状況はよい。出土遺物は中世須恵器、土師器、瓦器、瓦などである。また西側斜面からは平瓦がまともに出土している。

## 3. 遺構（PL・5）

2面の遺構面が確認された。下層より中世石積遺構、落ち込み、配石遺構、上層より近世の所産と思われる暗渠、溝、ピット等が検出されている。下層遺構は暗灰褐色土層上面で検出したもの、上層遺構は暗灰褐色土層上に堆積した粘土面で検出されたもの（ピット）、および下層遺構を切って形成されたもの（溝）の2種である。ピットと溝の構築面は明らかに異なるが、先後関係が確認できないため上層遺構として同列で扱うことにしたい。

## A. 下層遺構

下層遺構として整地層、落ち込みと、その護岸状に積まれた石積遺構、および配石遺構が検出された。

整地層は暗灰褐色土を、黒褐色土と淡黄灰色土の軟質互層上に50cm以上の厚さに積みあげたものである。版築はみられない。軟質の土層上に積まれておりいわゆる埋め立てに近い状況である。整地層内からは時期を決定できる遺物は出土しなかった。

落ち込みは整地層である暗灰褐色土層面上に構築されている。トレンチ外南方にひろがっていくため平面規模はおさえられなかったが、かなり大規模な落ち込みになるのではないと思われる。深さは約40cmを測る。落ち込みに伴う遺物はまったくなかった。

この落ち込みの護岸となるようなかたちで乱石積みの石積遺構が検出された。てのひら～人頭大の自然石をほぼ垂直に4～5段にわたって積み上げており、上部は若干削平されているようで残存高は最大40cmを測る。

配石遺構は整地層の西側斜面下より検出された。長径70cm程の砂岩を2石配している。上面のレベルは北側の1石のほうが数cm低い程度ではぼそろえられている。下部には根石が置かれている。基底面は軟質互層上面におかれており、石を据えるための掘形などは認められない。心々距離は1.25m、方向はN15°Eである。

このように整地層とその周囲におかれた石積施設から、寺院建築物の基壇が容易に想定できるものであるが、これらの遺構はすべて、黒褐色土と淡黄灰色土の軟質互層を整地した暗灰褐色土層面上に築かれていることは先述したとおりである。この軟質互層を寺院のベース面とすることは考えにくい。そのため、おそらく沼状の湿地の一部に整地をおこない、その整地層の端面を保護するための護岸状施設と考えたい。石積遺構と配石遺構は、寺院に伴う庭園的な性格をもつものであろうか。

## B. 上層遺構

落ち込みがやや埋没した後、西側斜面から配石遺構を覆うようにてのひら大

の砂岩河原石、黄色粘土、赤褐色粘土の順に堆積している様子が観察された。上層遺構はこの赤褐色粘土上面で検出されたピットと、整地層上面で検出された溝がある。

ピットは4カ所で検出された。すべて直径約20cmほどで、赤褐色粘土を切り込んでいる。遺物は瓦質土器の小片が出土しているが、図化にたえられるものではなかった。埋土は灰色粘土である。

溝は整地層上面で検出された。落ち込みが埋積してから整地層上に形成されたものである。南端はちょうど落ち込み上部でおわるが、北はトレンチ外へのびる。埋土は暗灰色砂礫土である。溝は幅70cm、深さ15cmを測る。埋土より、巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、瓦片、土師器・小皿、瓦器細片が出土している。

また整地面に石組暗渠が構築されているが、これは「ヌキズ」として現在も使用されている水田の排水溝と考えられる。調査区北端にはその排出口が確認できた。伴う遺物はまったくないが、現地の古老によれば、近世の末期に築かれたということである。

#### 4. 遺物

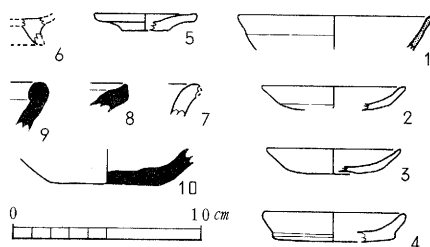
遺物は、遺構から出土したもので図化できるものはほとんどなく、包含層出土のものが大半を占める。須恵器・甕・鉢、土師器・皿・小皿、瓦器、瓦質土器、陶器（常滑焼）、軒丸・平瓦、丸・平瓦等が出土した。出土量は絶対的に少なく、図化できたものは少ない。

##### A. 土器類（PL.22、第11図）

1は瓦器・碗である。内外面はナデ調整が施される。特に口縁部外面はナデのためややくぼんでいる。焼成は良好で暗灰色を呈す。

2～4は土師器・小皿である。2・3は底部からわずかに内彎しながら外上方にのびる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。底部と口縁部の境は不明瞭である。調整は口縁部は内外面にヨコナデがくわえられる。底部は摩滅のため不明。どちらも焼成はややあまく軟質、胎土には白色鉱物を少し含み、色調は淡橙色を呈す。4は平らな底部から比較的急に口縁がのびる。口縁部は短く

厚い。端部は丸くおさまられる。底部と口縁部の境は明瞭で部分的に段差がみられる。調整は摩滅がひどくわからない。胎土にはクサリ礫の微細粒を若干含む、軟質で淡灰橙色の製品である。6は土師器の高台であるが、どのような器種に伴



第11図 仏性寺跡出土の土器

うものか不明である。摩滅がひどく調整は不明、胎土には径2mm大のチャートを含む。軟質で淡灰橙色を呈している。7は土師器・甕の口縁部である。摩滅がひどく調整は不明、胎土にはクサリ礫の微細粒を含む。軟質、黄白色の製品。

8は須恵器・甕口縁部である。内外面ともに回転ナデ調整が施される。内面には1条の凹線がみられる。胎土には、黒色粒と白色鉱物の細粒を少し含んでいる。焼成はやや甘く軟質、淡灰色を呈す。9は須恵器・鉢口縁部で、内面にはよく使用されたためか剝離が顕著にみられる。内外面ともに回転ナデ調整がみとめられる。焼成は良好、灰白色で、径1mm程度の石英が含まれる。10は須恵器・こね鉢底部である。摩耗がひどく調整は不明だが、底部外面には糸切り痕がのこる。焼成は甘く軟質、灰白色で胎土には有色鉱物の微細粒が含まれている。

5は調査区内で表採された磁器である。内面は淡灰緑色の釉がかけられている。底部には糸切り痕が残る。

## B. 瓦類 (PL.23、第12・13図)

軒瓦は、巴文軒丸瓦3型式、唐草文軒平瓦2型式が出土した。それぞれⅠ～Ⅲ、Ⅰ～Ⅱ型式と呼称し説明を加えたい。

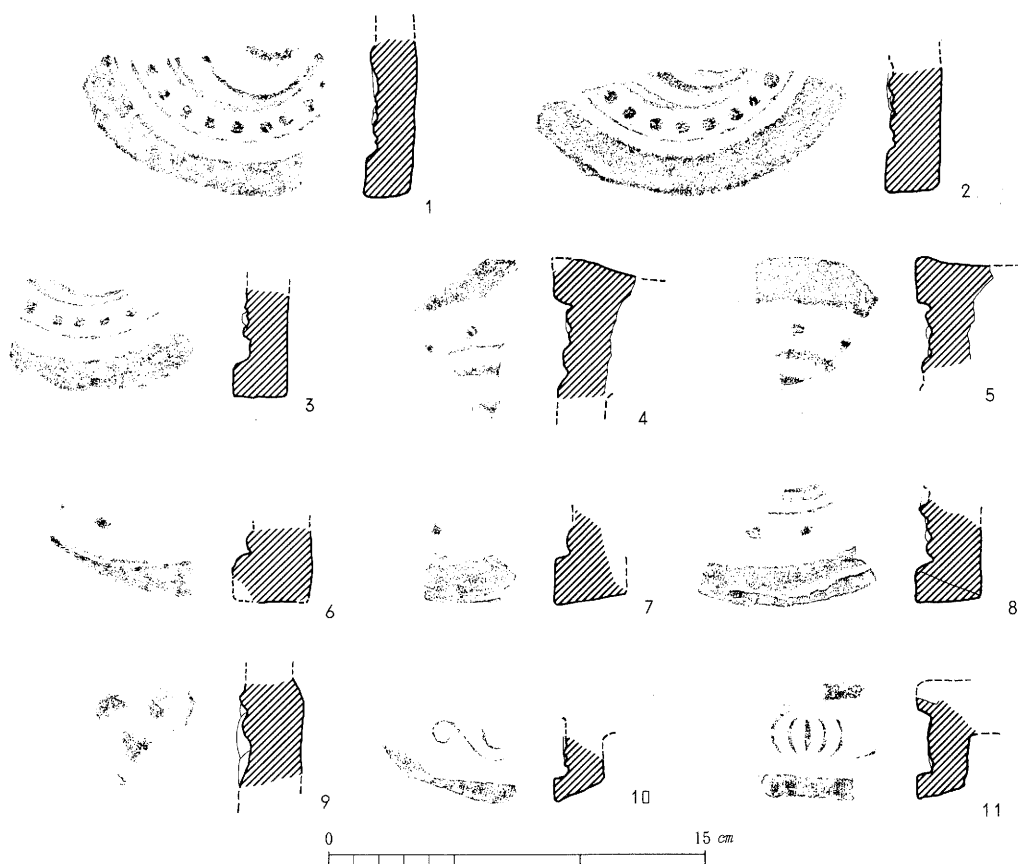
### 軒丸瓦

Ⅰ型式 細い界線で区画される内区に巴文を配する。巴の尾部は長くのび、界線と合致する。巴の頭部は欠落しており不明であるが、全体に低く細さを感じられるものである。外区にはややこぶりの珠文が並ぶ連珠文が配置される。外区の外側にも細い界線がめぐる。周縁は低く、その上面は瓦当面とはほぼ平行である。小片ばかりのため、丸瓦部との接合関係はわからない。瓦当面には離

れ砂がみられる。摩滅のためよくわからないが、瓦当裏面はナデ調整で平滑に仕上げられるようである。焼成は甘く軟質で、胎土には径1mm程のクサリ礫や有色鉱物の細粒を含む個体が多く認められる。平安時代後期から鎌倉時代のものであろう。3点のみ出土した。(1~3)

Ⅱ型式 内区には太く力強さが感じられる肉厚な巴文を表現する。巴の頭部については不明である。残りのよい個体では、巴のやや内部よりに稜線がみられる。界線は認められない。外区には大きい珠文を比較的疎に配する。周縁は高く、内部に向かってやや傾く。細片のため確かではないが、丸瓦はやや高い位置に接合するようである。瓦当裏面は丁寧にナデが施される。焼成は良好で、胎土にはクサリ礫は多いが有色鉱物はあまり含まないものが多い。鎌倉時代以降の時期を考えておきたい。5点出土したのみである。(4~8)

Ⅲ型式 巴の頭部のみの破片である。Ⅰ・Ⅱ型式のどちらに対応するか、あ



第12図 仏性寺跡出土の軒瓦

るいはまったく別のものであるか判定できないため、1点のみの出土であるが独立した型式を設定した。巴の頭部はやや丸くおさまるが、中心で接合はしない。やや肉厚な印象をうけるものである。離れ砂はみられない。裏面は丁寧なナデ調整が施される。焼成は良好で硬質、胎土にはクサリ礫と黒色鉱物の細粒を多く含む。(9)

このほかに軒丸瓦の丸瓦部のみが出土している。周縁には文様はなく、高いものだが傾斜はみられない。瓦当との接合面には、丸瓦の長軸にほぼ平行なヘラ描き沈線が施され、接合を容易にしているようすがうかがえる。

### 軒平瓦

I 型式 唐草文の向って左端の一部が残るのみである。細いがしっかりした蕨手が2回以上反転する。界線はみとめられない。周縁は細く低いものである。瓦当側面、下面および裏面は丁寧にナデ調整が施されている。全体にシャープかつ繊細なイメージを受ける製品である。焼成は良好で硬質、胎土は精良で淡橙灰色を呈す。地山直上包含層から1点のみ出土した。(10)

II 型式 均整唐草文の中心飾り部のみである。中心に1葉を置きその両側に2葉ずつ配している。やや大きく抽象的なもので、繊細さは感じられない。瓦当裏面および下面にはナデ調整を施す。焼成は良好で硬質、胎土は精良なものである。暗灰色を呈す。1点だけ出土した。

軒平瓦でも同様に接合部ののこる平瓦部が出土した。接合面にはやはりヘラ描き沈線が施されている。瓦当上縁は横位のヘラケズリによって面取りされている。

### 丸瓦

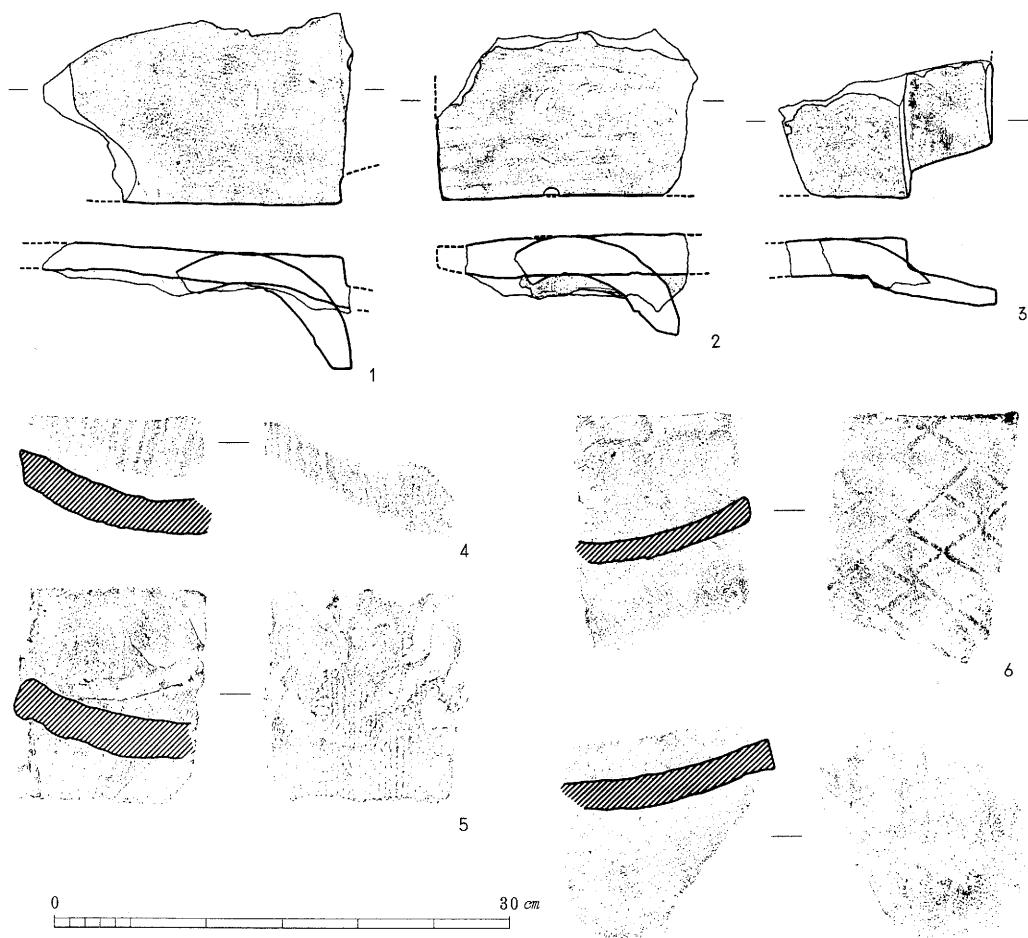
本調査区で出土した丸瓦はすべて玉縁丸瓦である。絶対数が少なく分類するにいたらなかった。

1は丸瓦部で、凸面に縄タタキののちナデ調整をおこなっているが、縄タタキ痕が大部分明瞭にのこっている。凹面には糸切り痕、布目圧痕がみられる。側端面および凹面側の側縁はヘラケズリで形を整えている。胎土には径2mm大のクサリ礫や白色黒色の有色鉱物を多く含む。2も同じく丸瓦部である。凸面は丁寧に長軸方向に平行なヘラケズリをおこなった後、ナデ調整を施して仕上

げる。凹面には糸切り痕、布目圧痕が残る。側端面、広端面および凹面側の側縁はヘラケズリで形を整えている。また玉縁と重なる部分の凹面側はヘラケズリで大きくえぐっており、瓦を葺いたときに収まりをよくしている。胎土は緻密でクサリ礫を若干含んでいる。3は玉縁部である。玉縁は薄く長いもので、シャープな印象を受ける。凸面はナデ調整で美しくしあげている。凹面には糸切り痕、布目圧痕がみられる。玉縁の先端面、凹面側先端縁と側面はヘラケズリが施される。胎土は精緻でごくまれにチャートの細粒がみられる。3点ともに焼成は良好で硬質、色調は暗灰色を呈している。

### 平瓦

平瓦もやはり出土数はごくわずかであるが、Ⅰ～Ⅳの4型式に分類することができた。以下型式別に説明を加えたい。



第13図 仏性寺跡出土の丸・平瓦

Ⅰ型式 凸面に粗い縄タタキ痕が残る。条痕は側端に平行である。条痕の間隔は約1 cmと非常に粗いものである。凹面にはやはり側端に平行な圧痕が十数本みられる。間隔は6～8 mmと狭いもので、杵板圧痕とは考えにくいがその可能性も否定できない。あるいは縄の圧痕であろうか。摩滅が著しいため詳細の観察は不可能である。側端面はヘラケズリが施される。胎土は粗く径1 mm大のクサリ礫とチャートがわずかに含まれる。焼成は甘く軟質、淡灰白色の製品である。(4)

Ⅱ型式 凸面に側端平行の縄タタキがみられる。タタキの後狭端付近のみ無造作に指で粘土を押えつけている。凹面には糸切り痕および布目圧痕の後から縦横無尽に強いナデが施されるが、それも非常に粗いもので、なおも圧痕はナデの間隔から観察することができる。狭端、側端ともにナデ調整が施されるがその後から凹凸面のナデがおこなわれているため、各端面に粘土がかぶさっている。雑な調整である。胎土は緻密である。焼成は良好で硬質、淡青灰色を呈す。(5)

Ⅲ型式 凸面に斜格子タタキが施されるものである。叩き板の単位は幅5 cm、長さ15 cm以上を測る。タタキ痕が文様のな意味あいをもつのか、整然とならべられている。凹面は摩滅のためよくわからないが、糸切り痕が部分的に残り、離れ砂がみられる。側端、狭端両面はヘラケズリで整えられる。また、凹面側の狭端縁はヘラケズリで面取りされている。比較的薄くつくられている。胎土には径2 mm以下の長石やクサリ礫、チャートなどを多量に含んでいる。焼成は甘く軟質、灰白色を呈している。(6)

Ⅳ型式 摩滅のため確実ではないが、凸面には糸切り痕がのこり部分的にナデ調整が施されているのみである。凹面には糸切り痕が残る。側端面はヘラケズリが施される。胎土には径5 mm大のチャート礫、石英および有色鉱物の細粒を多く含む。焼成は甘く軟質、色調は灰白色を呈す。(7)

以上が本調査区出土の瓦類である。大半が特定の層位あるいは遺構にともなうということを、確定できないものばかりである。今後の調査に遺構との関連を追及することを委ねたい。

## 第5章 岡中遺跡の調査

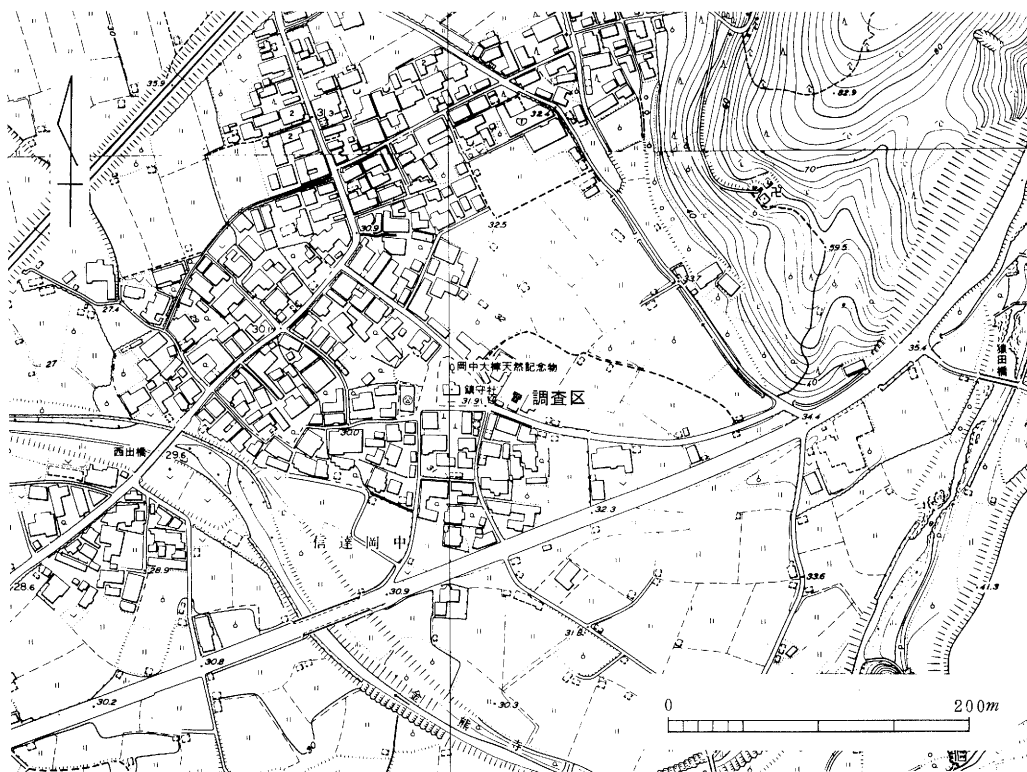
### 1. 位置（第14図）

調査区は馬場丘陵の南端にあたる愛宕山の西南方、蛇行する金熊寺川の右岸に位置している。金熊寺川が流れを変えながら形成した沖積段丘面上に立地する。西北50mの地点には府天然記念物岡中鎮守社の大樟がある。岡中の集落を通過して山中溪へぬける小栗街道とは、最短100mほどの距離である。

調査区の小字について、登記上は「長善寺」であるが、現地では「テラマエ（寺前）」と呼称されている。周辺には「長善寺」の小字が多くみられる。

なお岡中遺跡は新規発見されたもので、当調査が初めての発掘調査となる。遺跡の範囲は現在のところ東限が愛宕山、南・西限が金熊寺川、北限がJ R阪和線で区切られる東西200m、南北250mの偏楕円の範囲を占めるものである。

当調査区は遺跡のほぼ中央やや南よりに位置しており、現在の地番では信達岡中262-1にあたる。



第14図 岡中遺跡調査区位置図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL・6)

基本的な層位は、耕土と2層からなる床土を除けば上より、暗黄灰色土、暗灰色含礫土、暗灰褐色含礫土の地山層と続くものである。ただし部分的に暗黄灰色土の下層に淡灰色土あるいは淡褐色土の薄い層がはさまることがある。また地山直上に暗黄灰色含礫土が部分的に堆積している状況がみられた。遺物包含層は暗灰色含礫土と暗黄灰色含礫土であり、後者により多くの遺物が含まれている。

## 3. 遺構 (PL・6、第15・16図)

小面積の調査にかかわらず多くの遺構が検出された。その数はピット4、土坑20、集石遺構1の多きを数える。

### ピット

ピットは4カ所で検出された。すべて直径20cmほどの円形プランを有している。3のみ柱穴が確認された。埋土は1が黄褐色混じり灰色土、2と4が暗灰褐色土、3の掘形が黒褐色混じり茶灰色土、柱穴が黄色混じり灰色土である。このうち2～4が直線上に並び、その間隔は心々で約1.4mを測る。

### SX01

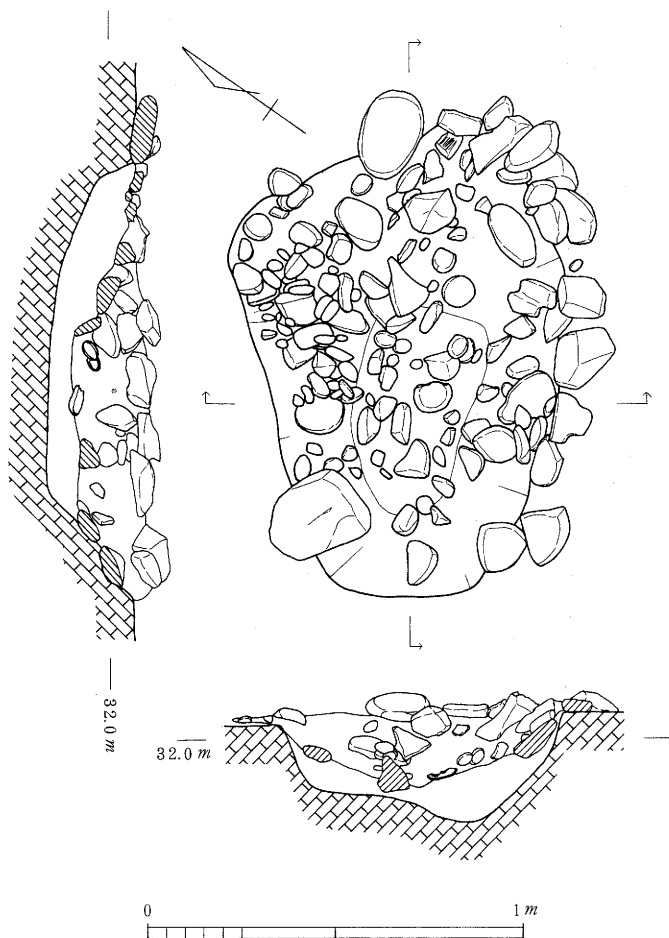
本来不定型の土坑として扱うべき遺構であるが、土坑内に土師器が埋納された状況が確認できたので、単なる土坑とは一線を画してここではSX01の呼称を用いることにした。

トレンチの中央部、地山直上の遺物包含層の上面で検出された。地山面を掘り込んでつくられているものである。いびつな楕円形を呈しており、その外縁には部分的に河原石が並べられている。埋土は上層より淡黄灰色土、暗灰色砂礫土の2層に分かれる。長径1.1m、短径0.9m、完掘で30cmの深さを測る。

土師器が埋納されていたのは、暗灰色砂礫土上面である。上向きに置かれた皿Bのそばに、小皿A2点が同じく上向きで、重ねられた状況で出土した。このほかに土師器・皿A・B・C・小皿A・B・D、須恵器・片口こね鉢、瓦器、瓦片が出土している。

### SK 01

楕円形プランをもつ浅い土坑である。包含層上面での検出。トレンチ外にひろがるため全貌は知り得ない。黄灰白色粘土が充填されているが、強く固められてはいない。埋土には長さ2～5mm程の炭片が顕著に認められる。長径80cm以上、短径50cm、深さ10cmを測る。土師器・皿A・B、須恵器・こね鉢、常滑焼片、瓦片が出土した。



第15図 岡中遺跡 SX 01

### SK 02

包含層上面で遺構の一部が検出されたにす

ぎないが、楕円形プランをもつものであろう。黄灰白色粘土が充填されている。SK 01に比べると淡黄灰色土が多く含まれている。長径70cm以上、短径40cm以上、深さ5cmを測る。遺物は土師器・小皿Aが出土している。

### SK 03

楕円形プランの浅い土坑である。地山上面で検出された。埋土はややシルトに近い褐色土である。黄灰白色粘土のブロックを若干含む。長径90cm、短径60cm、深さ10cmを測る。土師器・皿・小皿C・紀伊型甕、瓦器などが出土したが、みな細片ばかりで図化できる遺物はない。

### SK 04

平面楕円形の浅い土坑である。地山上面で検出された。埋土は暗灰色砂礫土

で、黄灰白色粘土のブロックを若干含む。長径70cm、短径40cm、深さ10cmを測る。遺物は土師器・皿C・小皿D・紀伊型甕、瓦器が出土している。

#### SK05

平面楕円形の浅い土坑の一部が深く落ち込んでいる。土坑にピットが重複したものである可能性は払拭できない。埋土は暗灰色砂質土からなる。地山直上包含層を切り込んでいる。長径80cm、短径40cm、深さは浅い部分で10cm、深い部分では25cmを測る。土師器・皿A・B・小皿A・D・E・F・紀伊型甕、須恵器、白磁・椀、青磁・椀、瓦器、瓦が出土した。

#### SK06

SK05を切って掘り込まれている。トレンチ外に大部分が拡がるもので平面形は不明である。底は平坦面となっている。地山上面から検出されたものである。埋土は暗黄灰色土である。南北80cm以上、深さ30cmを測る。遺物は土師器・中皿A・小皿Cが含まれていた。

#### SK07

SK06同様トレンチに一部がかかったにすぎず、全容はわからない。埋土は暗黄灰色土である。地山上面から検出された。東西60cm以上、深さ15cmをはかる。土師器・皿C・E・小皿A・D・すり鉢が出土している。

#### SK08

平面形は不定形の大型土坑である。地山上面で検出された。埋土は暗黄灰色土からなる。東西1.2m、南北1m、深さ20cmを測る。遺物は土師器や瓦器が多く出土しているが、すべて摩滅の激しい細片ばかりで図化できるものはまったくない。

#### SK09

地山上面で小土坑の一部が検出されたのみであるが、トレンチ外にはあまり拡がらないものと思われる。埋土は炭を多く含む暗褐色土で、土器の細片とともに焼土が若干認められる。SK10を切り込んでいる。規模は、東西30cm、南北20cm以上、深さ15cmを測る。土器の細片が多く含まれるが、図化できたのは瓦器のみである。

## SK 10

楕円形プランをもつと思われる小土坑であるが、SK 09に切られているため確かではない。SK 09とともにピットの可能性も捨てられない。埋土は炭混じりの黄灰色土である。地山上面で検出された。長径30 cm以上、短径20 cm、深さ10 cmを測る。土師器および瓦器の細片がわずかに出土しているが、図化は不可能である。

## SK 11

ややいびつな隅丸方形の平面形をもつ土坑である。SK 12・14を切り込み、SK 13・16に逆に切り込まれている。一辺60 cmの正方形に近いカタチで、深さは10 cmを測る。地山上面での検出。上面より土師器・小皿B・Dが、暗灰色砂質土の埋土からは土師器・皿A・D・小皿A・B・D・瓦器が出土している。

## SK 12

他の土坑との切り合い関係があるため全体を知ることはできないが、楕円形プランをもつものと思われる。SK 11に切り込まれている。地山上面で確認できた。埋土は暗灰色の砂礫土である。長径80 cm以上、短径50 cm、深さ20 cmを測る。土師器・皿A・小皿Eが出土した。

## SK 13

地山上面で検出された。楕円形プランの小土坑である。上面から土師器・皿・小皿が数点重なった状態で出土している。SK 11・15・16を切り込んでおり、先後関係がうかがえる。埋土は暗灰色土である。土師器・皿A・小皿A・B・Cおよび瓦器片が出土した。

## SK 14

SK 11に切られる小土坑である。いびつなかたちであるが、ピットの可能性も考えておきたい。トレンチ外へはあまり大きく拡がらないようである。少し強引に長・短の軸方向を設定すると、短軸方向に20 cm以上、長軸方向に20 cm以上、深さは5 cmを測る。埋土は灰色砂礫土からなる。地山上面で検出した。遺物は土師器細片が1点出土したのみである。図化は不可能であった。

## SK 15

SK 13に切り込まれる土坑である。SK 12との直接的な切り合い関係は認め

られない。ややいびつな楕円形を呈している。埋土は暗灰色砂礫土である。地山上面で検出された。長径50cm以上、短径40cm以上、深さ10cmを測る。土師器の細片が3点出土したがどれも図化はできなかった。

#### SK16

平面楕円形の小土坑である。SK13には切り込まれるが、SK11とは接するのみでSK11との間には切り合い関係はない。埋土は炭を含む黄灰色土である。地山上面で確認したもの。楕円の長径は50cm以上、短径30cm以上、深さ15cmを測る。出土した遺物は土師器と瓦器の細片が数点ずつで、みな図化はできなかった。

#### SK17

トレンチの東隅、集石遺構基底面すなわち地山面で確認された。不定型の大型土坑である。集石遺構にその大部分を覆いかくされていた。埋土は暗灰色土である。規模はトレンチの外に拡がるため、全容は知ることができない。長径1m以上、短径0.7m以上、深さ10cmを測る。遺物は土師器・小皿Aが認められる。

#### SK18

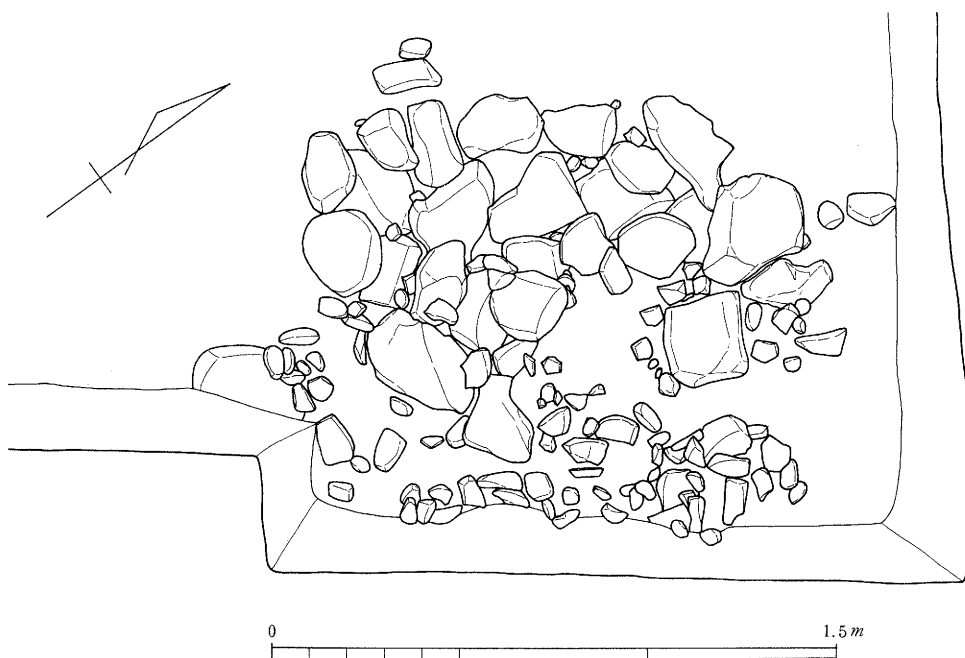
円形プランになろうかと思われる小土坑である。直径50cm、深さ15cmを測る。地山上面で検出された。埋土は2層にわかれ上層は暗黄灰色土、下層は灰色砂礫土となる。遺物は比較的上層に多く含まれている。上層からは土師器・皿が、下層からは土師器・小皿B、瓦器が出土した。下層の遺物は細片ばかりで図化できるものはなかった。

#### SK19

不定型の深い土坑で、SK01に切り込まれるものである。地山上面で検出されたものである。長径90cm、短径40cm、深さ40cmを測る。埋土は灰色砂質土からなる。遺物は土師器・小皿Aが出土している。

#### 集石遺構

トレンチの東隅付近で、河原石が楕円形に集合しているものが検出された。外周が楕円形になるようあきらかに意識して置かれているものであることから、集石遺構としてとらえた。手のひらから人頭大のやや偏平な砂岩河原石を、楕



第16図 岡中遺跡集石遺構

円を呈するように置いている。北西側は楕円状に整然と並んでいるが、南東側は楕円を意識するものの完全にはつなげられず、楕円形の範囲外にこぶし大の河原石が比較的多くみられる。大小の礫群すべてに火を受けたような痕跡はみとめられない。

集石の中央部は2～3石を積み上げるのに対し、外周部は1石しか配しないので、結果的にやや中央部が高くなるものである。石相互の間には黄褐色土が若干介在する。基底面は平坦で、下層には集石に伴うような掘り込みは認められない。下層にはわずかに黄褐色土が存在するが、それを除くとすぐに地山面があらわれる。規模は長径1.4 m、短径0.8 m（小礫群を含めると1.1 m以上）、基底面からの高さ20 cmを測る。出土遺物には土師器・皿A・小皿A・B、須恵器・鉢、蛸壺、瓦片などがある。

#### 4. 遺物（PL. 8・9）

出土遺物には須恵器・こね鉢、土師器・皿・小皿・甕、瓦器・椀、青磁・椀、

白磁・碗、黒色土器・碗、軒丸瓦、丸・平瓦、雁振瓦、壁土、鉄製品などがあげられる。このうち土師器が出土総量の大部分を占める。瓦器の出土は比較的少ない。ここでは特に土師器・皿・小皿に分類を試みた。以下遺構出土の遺物、包含層出土の遺物の順に説明を加えたい。

### 土師器・皿

多く出土しているが、残存の状況はあまりよくない。7 型式に分類できた。

A 内彎しながら上方にのびる口縁を持つ。口縁端部は丸くおさめる。やや厚手のものが多く丸底を呈す。全体に胎土は精緻だが、焼成はあまいものが多くみられる。色調は灰白色のものがもっとも多い。(53・54)

B わずかに外反しながら上方にのびる口縁を持つ。端部はまるく仕上げられる。比較的薄手の個体が多くみうけられる。平底である。焼成は良好だがやや軟質、胎土は精良なものが多い。色調はやはり灰白色中心である。(37)

C 完形でのこるものはないが、薄手の口縁部が直線的に外上方にのびるタイプ。底は平底と考えられる。口縁部と底部の接合痕が確認できるものが多く、接合面は内面側が長く伸びる。接合時に内面を口縁端部から底部にむかってなでつけたためであろう。接合方法とその後の調整がわかる唯一の型式である。出土数は少ない。焼成は良好で硬質、色調は灰褐色を呈す。(43・56)

D 完形でのこるものはない。外上方に大きくひらく口縁を持つ。口縁部と底部の境界が肥厚する傾向が顕著にみられる。絶対的に数が少ない。軟質で摩滅が激しい個体ばかりである。胎土は精良。(20・21)

E ゆるやかに内彎しながら外上方にのびる口縁をもつ皿である。外面は強い二段ナデが施される。胎土は緻密だが径 1 mm 以下の鉋物の細粒を若干含む。焼成はややあまく淡黄灰色を呈す。(90)

F 薄くつくられた底部から、口縁がすこし外彎しながら外上方にのびる。端部はうすいが、底部との境から端部直下までを内方に厚く肥厚させる独得のプローションをもつ。摩滅が著しく、調整の詳細はよくわからない。胎土は精良だが、焼成はわるく軟質、淡黄白色を呈している。(91)

G まっすぐ外上方にのびる口縁をもつ。内面には不定方向のハケ調整が施される。口縁端部付近の内外面はヨコナデで整形する。底部は不明であるが、や

や平底にちかいかたちになるとも考えられる。焼成は良好で硬質、胎土は精良なもので内面は黒褐色、外面は淡黄灰色を呈す製品である。(93)

#### 土師器・中皿

数は絶対的に少ないが、3型式に分類することができた。

A 丸い底部にゆるやかに内彎する口縁部がつくタイプ。皿Aを小さくしたようなプロポーションである。図化できたものはほとんどなかった。口径は約8cmを測るものである。(10)

B 皿Dと同様な形態をとるもので、口縁部と底部の境が肥厚する。やはり軟質で摩滅の進んだものばかりである。(65)

C 平らな底部とゆるやかに内彎する口縁部からなる。口縁端部は外方に折り曲げられる。底部と口縁部の境は外方に肥厚し丸みをおびたプロポーションを持つ。口縁部は内外面ともにヨコナデで仕上げられる。底部内面はナデ、外面は不調整である。胎土は精緻で、焼成はあまく軟質、淡黄灰色を呈す。(112)

#### 土師器・小皿

土師器の出土総数の大半を占める。少なくとも5型式に分類できた。

A 平らな底部から急に短い口縁部が直線的に立ち上がる。比較的薄手である。口縁端部は丸くおさめられる。口縁部には強くナデ調整を施すため、底部との境界に稜をなす個体が多くみられる。底部外面は不調整、内面はナデののち口縁部内外面に強いヨコナデを施す。小皿の大半を占める。(66・79)

B 厚手の製品で、短い口縁部はわずかに内彎する。底部と口縁部の境は明瞭である。全体にくずれた感じがするもので、シャープさは感じられない。内面は丁寧にナデが施されているが外面は雑になでられるだけである。焼成は良好硬質の製品が多い。色調は淡灰褐色が一般的である。(16)

C 薄い底部から、外彎しながら外上方にのびる口縁が急にたちあがる。底部と口縁部の境は明瞭で、シャープさが感じられる。焼成は良好で堅く、胎土は精緻なものである。色調は淡橙色を呈す。出土数は2点のみ。(8・52)

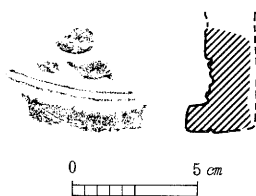
D 底部からゆるやかに内彎する口縁部が続く。底部がそのまま内彎し口縁に移行するようなかたちである。厚手と薄手のものがあり、薄手の製品の特徴として粗い胎土のものが顕著にみとめられる。外面はナデがおこなわれるがあま

り丁寧ではない。出土数は少ない。(18・19)

E 平坦で薄い底部にやや外彎ぎみの口縁がつく。底部と口縁部の境は肥厚するものである。絶対数がわずかで、しかも摩滅の激しいものなので、調整の詳細については不明である。焼成は甘く軟質のものばかりである。(22)

#### A. 遺構出土の遺物

ピット(72~74) ピット1より土師器・皿B(74)・紀伊型甕細片および瓦器細片が、ピット2より皿A(73)・小皿A(72)が出土している。ピット3掘形から土師器と瓦器の細片が、また柱穴から土師器細片がそれぞれ出土しているが図化は不可能であった。どれも摩滅が著しく調整は不明である。焼成は軟質なものばかりである。



第17図 岡中遺跡出土の軒丸瓦

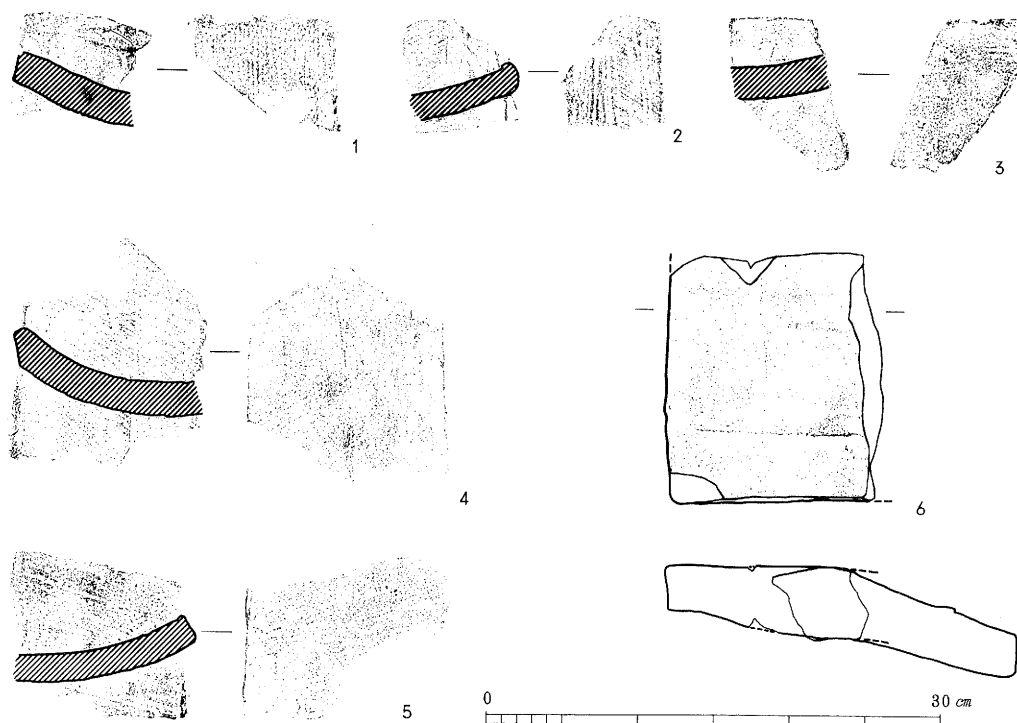
#### SX01(31~46)

土師器・皿A(42)・B(37・38)・C(43)・小皿A(31~34)・B(35・36)・D(39~41)、東播磨系の須恵器片口こね鉢(44~46)、平瓦等が出土している。重ねて埋納されていたのは、35~37の3点である。須恵器こね鉢44はまっすぐに外上方にのびる口縁部をもつ。端部にはやや丸みを帯びた面を持つ。内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好、胎土には径1mm以下の白色鉱物が含まれる。青灰色を呈す。45も同じく口縁端部には面を持つが、内傾しておりシャープである。端部外面を下方に拡張して端面を強調するものである。内外面ともにナデがおこなわれている。胎土は粗く焼成は良好である。46は薄手の製品で、口縁端部を内方へむけてつまみ出すことにより、端部に面をつくる。端面はほぼ水平である。ナデによる凹凸が激しく器壁は波うっている。胎土は粗く、焼成は甘くやや軟質、灰白色の製品である。

平瓦(第18図・1)は凸面に側縁に平行な縄タタキが残るもので、細い条痕が密にみられる。凹面は布目圧痕がのこる。側端・狭端面はヘラケズリが施される。凹面側の狭端縁および側縁は、やや広めの面取りがなされる。胎土に砂礫の混入がおおく、軟質の製品である。

#### SK01(1~6)

1~3は、土師器・皿である。2は皿A、1・3は皿Bにわけられる。4は



第18図 岡中遺跡出土の平・道具瓦

瓦器のややこぶりの碗である。口縁部外面はナデのためすこしへこんでいる。焼成は良好。5・6は須恵器・こね鉢のそれぞれ底部、口縁部である。5は底部からゆるやかに立ち上がる体部がわずかにのこる。内外面ともに摩滅のため調整はわからない。胎土は粗く焼成はややあまい。青灰色を呈す。6は体部から内上方に屈曲する口縁で、端部は丸くおさめられ、屈曲部外方には少しだけ拡張されるものである。胎土は精良で灰白色を呈している。このほかには、外面に平行タタキがのこる常滑焼片が出土している。

## SK 02

土師器・小皿A(67)が出土している。焼成は良好で硬質、色調は灰褐色を呈す。ほかには土師器細片が出土しているが図化に耐えるものはない。

## SK 03

土師器・皿・小皿C・紀伊型甕、瓦器などの細片が出土するのみ。図化できるものはまったくなかった。

#### SK 04

69は土師器・皿Cである。口縁端部に近いところをすこし肥厚させる。焼成は良好で硬質の製品。ほかに小皿D、紀伊型甕、瓦器・碗底部片などが出土したが図化できるものはなかった。

#### SK 05 (22～30)

土師器・皿A(25)・B(26)・D(24)・小皿A(23)・B(28)・D(27)・E(22)、器種不明須恵器(30)、白磁・碗(29)、青磁・碗、瓦器細片、雁振瓦、銭貨などが出土している。30は須恵器であるが小片であることも手伝って器種すら判断できない。外面には断面三角形の突帯がもうけられる。内外面ともに回転ヨコナデが施される。胎土は緻密で焼成は良好、青灰色を呈している。29の白磁は口縁端部付近までヘラケズリが施されているようすがうかがえる。釉はほぼ透明に近いものである。きめの細かな胎土には黒色鉱物の微細粒が多く含まれている。また図化できなかったが青磁は龍泉窯系のもので、外面には蓮弁が表出されている。蓮弁には稜線がおぼろげながらも確認できる。

雁振瓦(第18図・6)は、広端の一部が出土した。凸面には離れ砂が残る。縦位のヘラケズリが行われているようだが、摩滅のため詳細不明。凹面には1～1.5cm間隔の杵板圧痕がみられる。広端側にはヘラケズリによるエグリが施され玉縁との重なりをよくしている。側端面はヘラケズリで整えられる。焼成はあまく軟質、このため風化が進み摩滅が著しい。胎土は径2mm程のクサリ礫を少し含む。色調は暗灰色を呈している。

銭貨は風化が激しく、文字はまったく判読できなかった。

#### SK 06 (62・65)

65は土師器・中皿B、62は小皿Dである。62は薄手のもので、胎土は比較的粗く淡橙灰色を呈している。このほかには土師器細片が出土したのみである。



スケール 1:1

第19図 岡中遺跡  
出土の銭貨

#### SK 07 (55～61)

土師器・皿C(56)・小皿A(55)・D(57・58)・すり鉢、瓦器などが出土している。すり鉢は底部の小片であり、また摩滅が著しいため詳細は知り得ない。外面には縦位のハケ調整が施されるのがかろうじて看取できる程度である。胎

土には径 3 mm 大のチャートを非常に多く含むもので、焼成は甘く軟質の製品。  
またこのほかに土師器の高台が 1 点みられるが、どのような器種にともなうものかはわからない。瓦器を模倣したものであろうか。

#### SK 08

土師器、瓦器などの細片ばかりで、図化できるものはなかった。

#### SK 09

71 は瓦器・碗である。内面にのみ暗文が疎に施されている。口縁外面はナデ調整により若干へこんでいる。他は土師器細片ばかりで図示できないものばかりである。

#### SK 10

土師器、瓦器の細片ばかりで、図化できるものはなかった。

#### SK 11 (14~21)

土師器・皿 A・D (20・21)・小皿 A (14・15)・B (16・17)・D (18・19)、瓦器片が出土した。18 は小皿 D でも胎土は粗く、SK 06 出土の 62 と胎土・焼成が非常によく似ている。同一工人が製作したものであろうか。

#### SK 12

70 は土師器・皿 A である。このほかに小皿片も出土しているが、型式の判別が不可能な小片である。

#### SK 13 (47~54)

土坑上面から土師器、瓦器が重ねられた状態で一括出土した。土師器・皿 A (51・53・54)・小皿 A (47・48)・B (49・50)・C (52) が図化できたが、他の瓦器などは細片で図化は不可能だった。

#### SK 14

土師器の細片が 1 点出土したのみ。図示不可能。

#### SK 15

土師器の細片が 3 点出土したのみ。図化はどれもできなかった。

#### SK 16

瓦器細片が数点出土したが、図化に耐え得るものはなかった。

## SK17

土師器・小皿 A (64) が 1 点出土した。

## SK18

埋土上層より土師器・皿 A (68) が 1 点検出された。下層からは図化できないものの土師器・小皿 B が瓦器細片とともに出土している。

## SK19

土師器・小皿 A (63・69) が出土している。

## 集石遺構 (7～13)

土師器・皿 D (11)・中皿 A (10)・小皿 A (7)・B (8・9)、須恵器・鉢 (13)、蛸壺 (12) の他、玉縁丸瓦の細片も出土した。

## B. 包含層出土の遺物 (PL. 9、第17・18図)

包含層出土遺物には土師器・皿・小皿・甕・須恵器・壺・こね鉢、瓦器、瓦質土器、磁器、陶器、黒色土器、軒丸瓦、平瓦、壁土などがある。79～104 は地山直上層以外から出土したもの、105～147 は地山直上の暗黄灰色含礫土から出土したものである。

### 地山直上層以外出土の遺物

出土遺物には土師器、須恵器、磁器、陶器、平瓦、壁土が出土している。

土師器は、92 が皿 A、86～89 は皿 B、90・91・93 がそれぞれ皿 E・F・G の各型式のものである。また 79～84 および 96・97 は小皿 A にわけられる。また 79・96・97 の内面にはススが付着している。このほかに甕口縁 (98) が 1 点出土している。調整については摩滅が激しく観察不能である。胎土は精良だが、軟質の製品である。

101～104 は須恵器・こね鉢である。101 は口縁端部に内傾する面を持つ。胎土には黒色鋳物の細粒が含まれている。102 は口縁端部を内上方に強く屈曲させ、屈曲部を外方に肥厚させる。胎土には径 5 mm 程の礫が混入しているほかに、石英の細粒が少し含まれている。103 は口縁端部を上方に屈曲させる。屈曲部外面はやや肥厚し丸みを帯びる。口縁端部はおさえられており、内方にすこし突出する。胎土には砂粒の混入はあまりみられない。104 は外上方にのび

る口縁をもち、外面を下方に肥厚させることにより端部に内傾する面を形成する。端部上端は使用されたことにより摩滅が激しい。胎土は粗く白色鉱物が少し含まれている。

99・100は瓦器碗の底部である。どちらも見込みには暗文が疎にほどこされている。比較的薄手の製品である。

85は磁器である。小皿であろうか。釉は内外面すべてが剥落しているため、ヨコナデで整形したようすがはっきりとうかがえる。わずかにのこった釉から淡灰色を呈していたことがわかる。

94は陶器の甕口縁部で、端部はやや中央がくぼむ面を持ち、上方に拡張させているものである。淡褐色の釉がかかる。灰色を呈する胎土には砂礫などの混入はみとめられない。98は陶器の底部である。全体に淡緑色の釉がかかるもので、粗い貫入がみられる。見込みの中央に近い部分に、スタンプ文の一部がのこっている。美濃焼であろうか。胎土は灰白色で精良なものである。

平瓦（第18図）3は凹面にも丁寧なナデ調整がおこなわれている。端面はヘラケズリが施されるが、面取りはされていない。胎土にクサリ礫や有色鉱物の細粒を多く含んでいる。軟質の製品である。4は凸面にも糸切り痕がみられる。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残る。凸面にのみ離れ砂が認められる。側端面はヘラケズリが施され、凹面側の側縁を面取りののちナデ調整で仕上げる。硬質で淡青灰色を呈している。胎土は緻密だが径1 mm以下の灰色クサリ礫が含まれる。

図示できなかったが、残存で直径3 cmほどのスサ入り焼土塊が数点出土した。火熱を受け赤変している。粘土は非常に粗いもので、砂礫が多く含まれている。壁土あるいは屋根土であろう。

#### 地山直上層出土の遺物

地山直上層から土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、磁器、陶器、黒色土器、軒丸瓦、平瓦が出土した。

土師器は、119～121と123が皿A、119・122が皿B、112が中皿C、105～107・111・113～116が小皿A、110が小皿B、108・109・117が小皿Dに分類できた。このうち107は内面にススが付着している。また124・125・135・137

が甕である。甕の 124 は、強く屈曲する頸部から外上方に口縁がのびるもので口縁端部は上方につまみあげられる。口縁端部は中央のくぼむ内傾面を持つ。内面頸部以下にはナデ調整、他は全体にヨコナデが施される。125 も同じく頸部の屈曲は強いもので、やや外彎ぎみの口縁をもつ。口縁端部は下方につまみだされ、やや丸みをもつ内傾面をもつ。外面はヨコナデがおこなわれるが、内面は摩滅のためわからない。どちらも外面にはススの付着が顕著に認められる。

135 は紀伊型甕の突帯である。体部との、接合面がわずかに観察できる。以上 3 点はみな胎土に砂礫を非常に多く含んでおり、焼成は良好で硬質、暗灰褐色をていしている。137 は土師器・甕である。外上方にのびる口縁は、端部を上方につまみあげられている。端部内面は強いナデのためやや彎曲する。焼成はあまくやや軟質で、胎土には黒雲母など鉱物の細粒をわずかに含んでいる。

143 ～ 147 は須恵器である。143 には高台がつく。欠損のため明らかではないが、断面逆台形を呈し低くふんばるものになると思われる。内面には淡緑色の自然釉が認められる。体部外面はヘラケズリののち丁寧なナデ調整が施され、内面にも全体にナデ調整がおこなわれる。胎土には墨をぼかしたような黒色粒や長石の吹き出しが顕著にみられる。焼成は良好で硬質、淡灰色を呈す。144・147 はこね鉢である。144 は口縁外面を下方に肥厚させシャープな内傾面をつくる。上端はおさえられ、わずかに内方に突出する。145 は口縁端部を外方に肥厚させる。全体に回転ナデで仕上げられる。146・147 はともにまっすぐ外上方にのびる体部から、一度外方におりまげそこから上方にたちあげて口縁部をつくる。端部外面はやや内傾する面をもつ。調整は全体に回転ナデが施される。146・147 は別個体としたが、同一個体の可能性があるものである。こね鉢はすべて胎土には白色および黒色鉱物の微細粒を含んでおり、焼成は良好でやや軟質の製品がおおい。

127 ～ 133 は瓦器である。127 は小皿で、内外面はヨコナデが施される。128 は椀で口縁部外面はナデのため少しくぼんでいる。内面にはナデ調整の後暗文が疎に施され、外面は端部付近にナデがおこなわれる以外は不調整である。やや厚手の製品。129 ～ 132 は椀の底部ですべてに高台がつく。130 の見込みに螺旋状の暗文が施される。また 132 は高台がしっかりと外方にふんばるもの

で、見込みには密に暗文が施されている。瓦器は全体に胎土は精良だが、焼成は甘く軟質のものばかりである。

126 は瓦質土器・すり鉢底部である。内面は体部にハケ調整が、底部にはナデが施される。外面は摩滅のため不明である。胎土は粗いもので、焼成はあまく軟質、色調は暗灰褐色を呈している。

138 ～ 142 は磁器および陶器である。138・139 はともに龍泉窯系の青磁・椀で、外面に蓮弁を表現している。蓮弁にはおぼろげながらも稜線が存在する。釉は灰緑色を呈しており、139 には全体に非常に粗い貫入がみられる。胎土には白色や黒色の有色鉱物の微細粒が少し含まれている。141 は底部片で、見込みには刺突文で文様が表出されている。底部外面はヘラケズリが施されている。釉は透明に近い緑色。胎土には黒色鉱物の微細粒がわずかに含まれている。142 は小型壺の口縁部である。外面には縦位の沈線が施される。口縁端部はヘラケズリで面取りされている。胎土には黒色鉱物の微細粒がわずかに含まれている。136 は陶器の口縁部である。端部外面をやや肥厚させる。回転ナデで仕上げられている。内面には自然釉がかかる。色調は淡灰褐色を呈し、胎土は精良なものである。140 は陶器・すり鉢である。内面には11条以上を1単位とするすり目がみられる。外面はヘラケズリののちナデがおこなわれる。胎土には径1 mm程の白色粒が少し含まれている。暗灰褐色を呈す。

黒色土器の底部が2点出土した。133 は薄い底部にやや外方にふんばる高台がつく。134 は厚手の底部にまっすぐ下方にのびる高台がつくもの。どちらも張り付け高台である。内部のみ黒色を呈している。胎土は両者ともに精良で、やや軟質の製品である。

軒丸瓦が1点出土している。太細2重の界線で区画される内区には、蓮弁の側面観が表出される。肉厚で非常に立体的である。欠損のため蓮弁は3葉しか残らないが、仏像文の台座を表現したものであろう。やや肉薄の周縁は無文で、上面は瓦当中心に向ってわずかに傾斜している。周縁上面から瓦当側面にかけてナデ調整で丁寧に仕上げられる。瓦当裏面は剝離しているため、調整は不明である。胎土は緻密で径1 mm以下の白色および黒色の鉱物を少し含んでいる。焼成はややあまく、軟質で淡灰白色の製品である。集石遺構付近の地山直上層

である、暗黄褐色含礫土より出土したものである。

平瓦2は凸面に側縁に平行な縄タタキの条痕が残るものである。条痕はやや太く疎である。凹面には糸切り痕、布目圧痕がみとめられる。側端面はナデ調整で仕上げられシャープさに欠けている。面取りはおこなわれない。胎土には若干有色鉱物の微細粒が含まれるがおおむね精良なもので、焼成は良好で堅緻、暗青灰色を呈している。比較的薄く造られた製品である。5は凸面に丁寧なナデ調整を施すものである。凹凸両面に糸切り痕がのこる。側端面にも糸切り痕状の痕跡がみられるが摩滅のためさだかではない。凹凸どちらの面にも離れ砂がのこる。焼成はあまく軟質で、胎土には径3 mm以下の赤色クサリ礫が非常に多く含まれるのが特徴的である。

## 第6章 まとめ

昭和62年度に実施した発掘調査は、男里遺跡10カ所、幡代遺跡、仏性寺跡、岡中遺跡が各1カ所の合計13カ所である。以下、順にまとめていくこととする。

男里遺跡において昭和50年度以降実施された行政機関による調査は、そのほとんどがトレンチ調査による小規模なものばかりで、十分な成果が与えられたわけではない。今年度も例年どおり個人住宅の建設に伴う事前の発掘調査が大半であるため、いずれも小面積の調査区しか設定できず遺構はもとより、遺物の検出すらままならぬ状態であることは、否定しがたい事実である。しかし、そうはいっても獲得された知見は決して少ないものではない。

調査は上述したごとく10カ所で行なわれた。遺跡は地形的に男里川の周辺に展開する自然堤防、氾濫原、沖積段丘等にかけて広がりをもっている。今回は1・2・5区が自然堤防上、6～10区が沖積段丘の縁辺、3・4区が氾濫原の位置にあたる。このうち1区からは、約60点の河原石を充填した土坑が、7区からはピットおよび溝がそれぞれ検出されている。

1区で検出された土坑内の礫の大半は火をうけた痕跡を残し、その下部からは、完形の瓦質搗鉢1点、ほぼ完形の雁振瓦2点、銭貨3点の他、丸・平瓦片、瓦器片等が出土している。また土坑の直上には、あたかも意識的に敷いたような状況を思わす粘土層の堆積が認められ、ほぼ完形のものを含む土師器・小皿が3点まとまった状態で検出された。

これらの状況からして墓墳的性格の一面も匂わすが、決定はしがたい。あるいは地鎮の可能性も考えられる。いずれにせよ、中世の瓦類が出土していることからして周辺に寺院跡の存在が十分考えられ、土坑も関連したものと思われる。この地点より南南東650m付近には平安後期創建の光平寺跡が所在するが、その位置関係からして、調査区付近には別の寺院跡が存在していた可能性が強い。周辺は明治14年に廃寺となった「宝蓮寺」が存在していた場所であり、現・光平寺境内に安置されている正平24年(1369年)の刻名のある石造五輪塔は元・宝蓮寺にあったものが移築されたといわれている。このことを考え合わせると、宝蓮寺の前身にあたるものであった可能性が考えられなくもない。

今後、光平寺跡と共に中世寺院の成立の背景を知るうえで非常に興味深いものである。

7区より検出されたピットおよび溝は、埋土から遺物の検出がなく確定的な時期決定はできないが、ピットはその形態からして奈良時代の柱掘形として、とらえられるものである。この調査区より南西25mの地点では昭和58年度に同じ奈良時代の所産になる建物掘形が検出されており、周辺一帯に当該期の掘立柱建物が遺存することが判明した。今後は、さらにその内容を究明することはもとより、上池西側に展開するであろう同時期の建物群との比較検討が不可欠となる。

このほか第4区では、遺物をまったく含まない黒褐色土層が確認された。この土層は、以前調査が実施されたF～H地点においてもその存在が認められているものである。いまだ少しその分布の在り方について述べると、旧河道の西側では、現在までのところ黒褐色土層は確認されていない。また今年度調査の第6～10区においても、検出されていない。

以上のことから黒褐色土層の範囲は、遺跡の北東部つまり北はF地点、東はG地点付近、南はH地点あたり、西は旧河道に至る範囲に限定されそうである。

さてこの土層の性格であるが、先述のごとく現在まで遺物の包含が確認されないこと等から、もしかすると生産基盤に関係するものかもしれない。形成された時期については、直上の包含層の出土遺物から中世以前になるとしか言い様がない。しかし、今後の調査いかんでは、男里遺跡における生産地の様相を知ることができるものであろう。

幡代遺跡の調査は、たった1カ所において小面積の調査を実施したのみであり、しかも検出された遺構の性格も判然としたものではない。また、現在まで実施された調査は非常に乏しく、データ不十分の感は否めないのが現状である。

よって、遺跡の展開を知る上ではいささか困難である。しかし、遺物包含層の存在が確認され、中世から近世にいたる日常雑器や、平・丸瓦などの瓦類が出土したことは、寺院乃至集落の実態を知るうえで、今後の貴重な資料となるであろう。

仏性寺跡においては、調査区が小面積のため検出された遺構の性格について

不明な部分が多いが、周辺より出土する軒瓦などからして下層遺構は、寺院創建時に伴うものである可能性が非常に強い。

先年の調査により出土した遺物から平安後期に創建され中・近世まで存続していた寺院跡であると考えられていたのであるが、今回の調査で初めて寺院そのものに伴うと思われる整地層や配石遺構などが検出され、同時に寺院の消長の一端をうかがえる軒瓦、平・丸瓦が出土したことは、大きな成果であった。

岡中遺跡で実施した調査も他の遺跡と同様に、調査区の面積が決して広くはない。にもかかわらず、ピット4カ所、土坑20カ所など多くの遺構が検出された。直径20cm程からなるピットには柱痕跡をとどめているものもあり、掘立柱建物跡に伴う柱掘形と容易に考えられる。時期は埋土内出土遺物などから、中世の所産になる。

また、軒丸瓦などの瓦類が出土したことは、瓦葺建物いいかえれば寺院そのものの存在を匂わすもので、時期的には平安後期から中世に至るものである。

今回が当該遺跡における調査の嚆矢であったが、遺跡の性格を究明していくのに必要な基礎資料は十分得られた。

今後は、調査データの積み重ねによりその内容を解明することはもとより、東北東約400mに所在する同時期に創建された林昌寺跡との関係を考えていかななくてはならない。

以上、今年度も小面積の点的調査を行ってきたわけであるが、期待に違わず多くの新たな知見が獲得された。調査対象となった遺跡はほとんどが不分明であるが、今回の様な小規模な面積の調査であっても、その実態を探っていけるだけの情報は、与えてくれるということを改めて痛感し、筆をおくこととする。

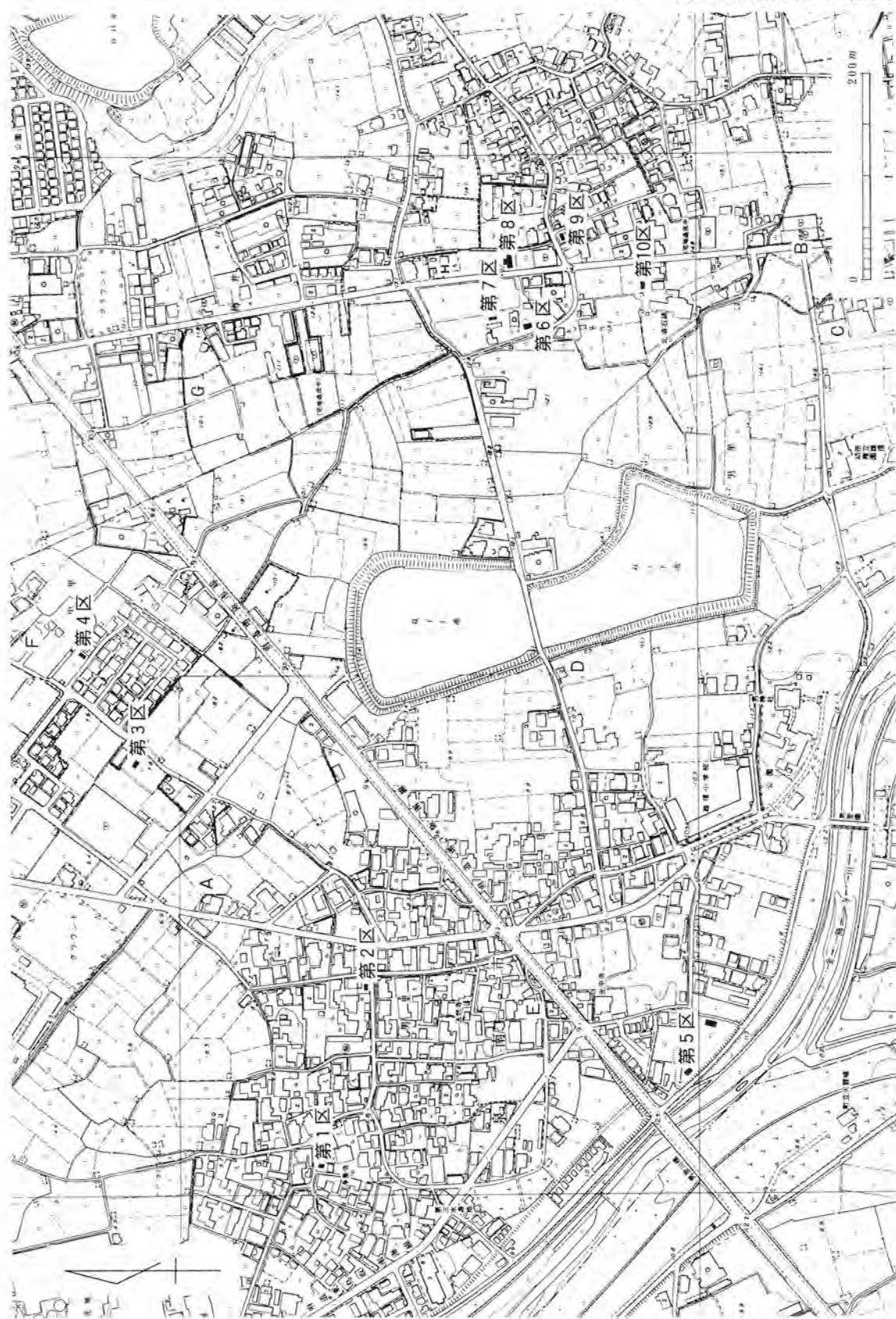
第5表 遺 跡 一 覧 表

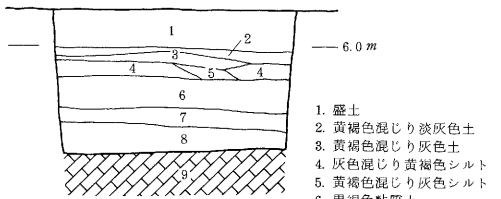
|    |         |    |           |     |           |     |           |
|----|---------|----|-----------|-----|-----------|-----|-----------|
| 1  | 千石堀城跡   | 41 | 市堂遺跡      | 81  | 羽倉崎遺跡     | 121 | 北野遺跡      |
| 2  | 白地谷遺跡   | 42 | 北之前遺跡     | 82  | 嘉祥寺神社本殿   | 122 | 中小路遺跡     |
| 3  | 正法寺跡    | 43 | 野々宮遺跡     | 83  | 吉見落陣屋跡    | 123 | 仏性寺跡      |
| 4  | 大谷池遺跡   | 44 | 総福寺天満宮本殿  | 84  | 船岡山遺跡     | 124 | 海宮宮池遺跡    |
| 5  | 大久保B遺跡  | 45 | 垣外遺跡      | 85  | 岡本廃寺      | 125 | 狐池遺跡      |
| 6  | 紺屋遺跡    | 46 | 屯田遺跡      | 86  | 田尻遺跡      | 126 | 高倉山東遺跡    |
| 7  | 隆井家書院   | 47 | 八王子遺跡     | 87  | 夫婦池遺跡     | 127 | 信ノ池遺跡     |
| 8  | 隆井家屋敷跡  | 48 | 慈眼院金堂・多宝塔 | 88  | 船岡山南遺跡    | 128 | 天神ノ森遺跡    |
| 9  | 大久保A遺跡  | 49 | 日根神社遺跡    | 89  | 慍井西遺跡     | 129 | 男里遺跡      |
| 10 | 中家住宅    | 50 | 西ノ上遺跡     | 90  | 藤波遺跡      | 130 | 光平寺跡      |
| 11 | 祭礼御旅所跡  | 51 | 土丸遺跡      | 91  | 道ノ池遺跡     | 131 | 光平寺石造五輪塔  |
| 12 | 東円寺遺跡   | 52 | 笹ノ山遺跡     | 92  | 岡ノ崎遺跡     | 132 | 前田池遺跡     |
| 13 | 小垣内遺跡   | 53 | 土丸南遺跡     | 93  | 中菖蒲遺跡     | 133 | 幡代遺跡      |
| 14 | 金剛法寺跡   | 54 | 雨山城跡      | 94  | 岸ノ下遺跡     | 134 | 幡代南遺跡     |
| 15 | 久保城跡    | 55 | 土丸城跡      | 95  | 慍井城跡      | 135 | 林昌寺銅鐸出土地  |
| 16 | 甲田小春家住宅 | 56 | 下大木遺跡     | 96  | 奥家住宅      | 136 | 林昌寺跡      |
| 17 | 五門北古墳   | 57 | 大木遺跡      | 97  | 諸目遺跡      | 137 | 林昌寺瓦窯     |
| 18 | 五門遺跡    | 58 | 中大木遺跡     | 98  | 椽ノ塚古墳     | 138 | 岡中鎮守社の樟   |
| 19 | 五門古墳    | 59 | 稻倉池北方遺跡   | 99  | 禅興寺跡      | 139 | 岡中遺跡      |
| 20 | 大浦中世墓地  | 60 | 鏡塚古墳      | 100 | ダイジョウ寺跡   | 140 | 岡中西遺跡     |
| 21 | 鳥羽殿城跡   | 61 | 川原遺跡      | 101 | 三軒屋遺跡     | 141 | 滑瀬遺跡      |
| 22 | 来迎寺     | 62 | 向井山遺跡     | 102 | 下村1号墳     | 142 | 金熊寺おがたまの木 |
| 23 | 山ノ下城跡   | 63 | 梨谷遺跡      | 103 | 下村2号墳     | 143 | 雨山南遺跡     |
| 24 | 墓の谷遺跡   | 64 | 母山遺跡      | 104 | 新家オドリ山遺跡  | 144 | 雨山遺跡      |
| 25 | 池ノ谷遺跡   | 65 | 母山近世墓地    | 105 | 新家オドリ山東遺跡 | 145 | 高田山古墳群    |
| 26 | 成合寺遺跡   | 66 | 棚原遺跡      | 106 | 新家オドリ山南遺跡 | 146 | 平野寺(長楽寺)跡 |
| 27 | 山出遺跡    | 67 | 向井池遺跡     | 107 | 新家古墳群     | 147 | 皿田池古墳     |
| 28 | 湊遺跡     | 68 | 意賀美神社本殿   | 108 | フキアゲ山西遺跡  | 148 | 神光寺(蓮池)遺跡 |
| 29 | 檀波羅蜜寺跡  | 69 | 向井代遺跡     | 109 | 引谷池窯跡     | 149 | 三昧谷遺跡     |
| 30 | 檀波羅遺跡   | 70 | 上之郷牛神     | 110 | フキアゲ山東遺跡  | 150 | 石田山遺跡     |
| 31 | 佐野王子跡   | 71 | 机場遺跡      | 111 | フキアゲ山1号墳  | 151 | 井関遺跡      |
| 32 | 中嶋遺跡    | 72 | 日根野遺跡     | 112 | フキアゲ山2号墳  | 152 | 岩崎山遺跡     |
| 33 | 岡口遺跡    | 73 | 郷之芝遺跡     | 113 | 兎田古墳群     | 153 | 寺田山遺跡     |
| 34 | 小塚遺跡    | 74 | 植田池遺跡     | 114 | 別所遺跡      | 154 | 自然田遺跡     |
| 35 | 十二谷遺跡   | 75 | 長滝遺跡      | 115 | 高野遺跡      | 155 | 玉田山上方下円墳  |
| 36 | 丁田遺跡    | 76 | 安松遺跡      | 116 | 新家遺跡      | 156 | 玉田山古墳群    |
| 37 | 新池尻遺跡   | 77 | 末廣遺跡      | 117 | 向井山遺跡     | 157 | 玉田山遺跡     |
| 38 | 大坪遺跡    | 78 | 中開遺跡      | 118 | 一丘神社遺跡    | 158 | 玉田山須恵器窯跡  |
| 39 | 北庄司邸の樟  | 79 | 松原遺跡      | 119 | 海会寺跡      | 159 | 三升五合山遺跡   |
| 40 | 宮の前遺跡   | 80 | 羽倉崎東遺跡    | 120 | 既戸王子跡     |     |           |

# 版 図



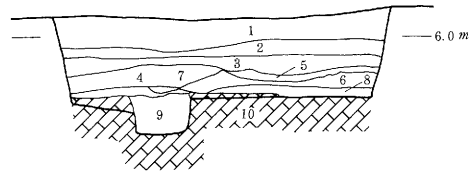
PL. 2 男里遺跡調査区位置図





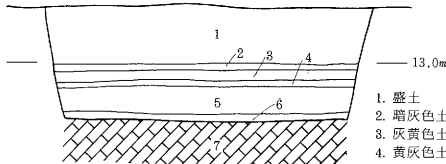
男里遺跡第2区  
北壁断面図

1. 盛土
2. 黄褐色混じり淡灰色土
3. 黄褐色混じり灰色土
4. 灰色混じり黄褐色シルト
5. 黄褐色混じり灰色シルト
6. 黒褐色粘質土
7. 灰黄褐色粘質土
8. 淡灰黄褐色粘質土
9. 灰色粘土混じり黄褐色礫層



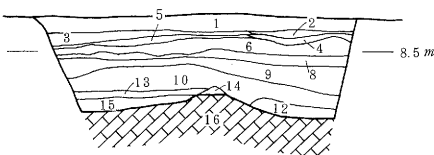
男里遺跡第1区遺構図並びに断面図

1. 盛土
2. 炭混じり灰褐色土
3. 礫混じり黄灰色土
4. 礫混じり暗灰褐色土
5. 暗灰色シルト
6. 灰褐色土
7. 黄灰色砂質土
8. 黄灰褐色粘土
9. 暗灰褐色粘土
10. 暗灰褐色砂礫土



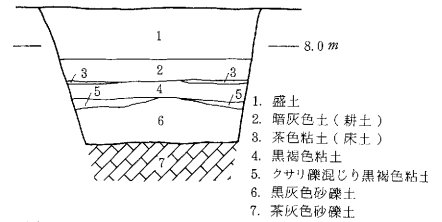
男里遺跡第8区東壁断面図

1. 盛土
2. 暗灰色土（耕土）
3. 灰黄色土（床土）
4. 黄灰色土
5. 灰色粘質土
6. 暗灰色粘質土
7. 淡灰色礫層



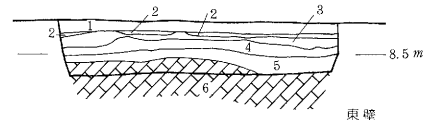
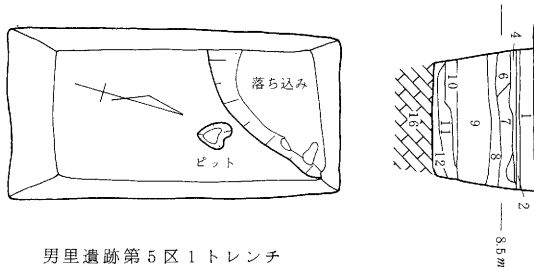
男里遺跡第5区1トレンチ  
遺構図並びに断面図

1. 黒灰色土（耕土）
2. 赤褐色土（床土）
3. 淡赤褐色土
4. 黄色混じり暗灰色土
5. 暗灰色土
6. 暗黄灰色土
7. 褐色混じり暗黄灰色土
8. 黄灰色土
9. 暗灰色礫
10. 黄灰色粘土
11. 褐色混じり灰色粘土
12. 灰色混じり黄色粘土
13. 黄色混じり褐灰色粘土
14. 灰褐色砂質土
15. 暗黄灰色砂質土
16. 黄灰色粘土

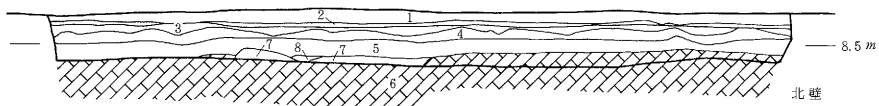


男里遺跡第4区  
北壁断面図

1. 盛土
2. 暗灰色土（耕土）
3. 茶色粘土（床土）
4. 黒褐色粘土
5. クサリ礫混じり黒褐色粘土
6. 黒灰色砂礫土
7. 茶灰色砂礫土

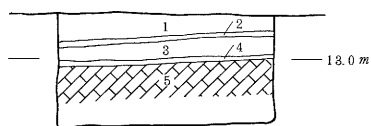


男里遺跡第5区2トレンチ断面図



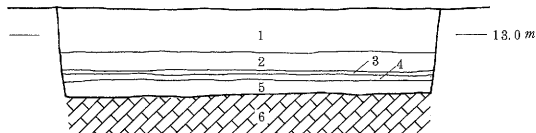
1. 黒灰色土（耕土）
2. 赤褐色土（床土）
3. 褐色混じり暗茶灰色土
4. 黄灰色土
5. 褐色混じり灰白色粘土
6. 淡黄灰色含礫土

# PL. 4 男里遺跡調査区②・幡代遺跡調査区



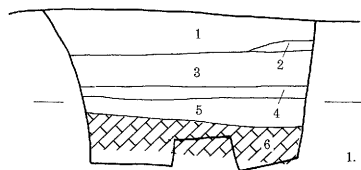
男里遺跡第6区  
東壁断面図

1. 盛土
2. コンクリート
3. 黒灰色土（耕土）
4. 暗黄灰色粘質土（床土）
5. 淡褐色礫層



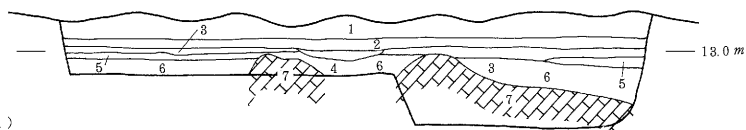
男里遺跡第7区遺構図及び断面図

1. 盛土
2. 暗灰色土（耕土）
3. 黄灰褐色土
4. 灰褐色土
5. 褐色土
6. 褐色混じり黄色土

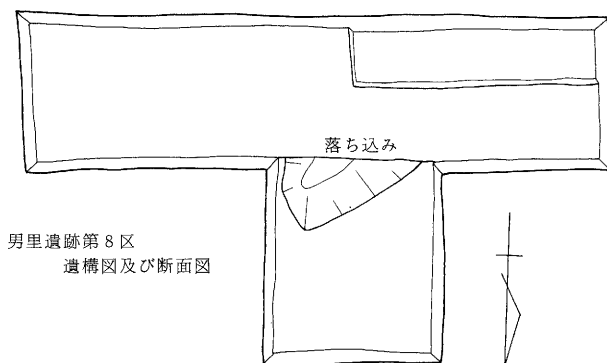


男里遺跡第9区  
北壁断面図

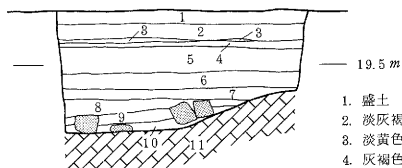
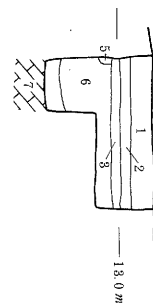
1. 盛土
2. 黄色粘土
3. 暗黄灰色土
4. 暗灰色含礫土
5. 暗黒灰色シルト
6. 青灰色混じり黄色粘土



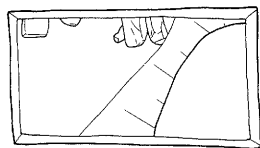
1. 暗灰色土（耕土）
2. 黄色混じり明灰色土
3. 黄褐色土
4. 暗灰褐色土
5. 黄灰色土
6. 暗褐色土
7. 暗茶褐色土



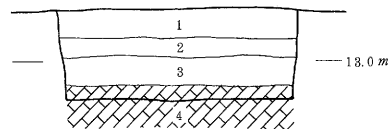
男里遺跡第8区  
遺構図及び断面図



1. 盛土
2. 淡灰褐色土
3. 淡黄色土
4. 灰褐色土
5. 濃灰色土
6. 灰褐色粘質土
7. 濃灰褐色粘質土
8. 褐色粘質土
9. 灰色粘土
10. 褐灰色粘質土
11. 黄褐色土

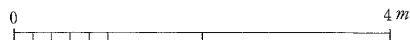


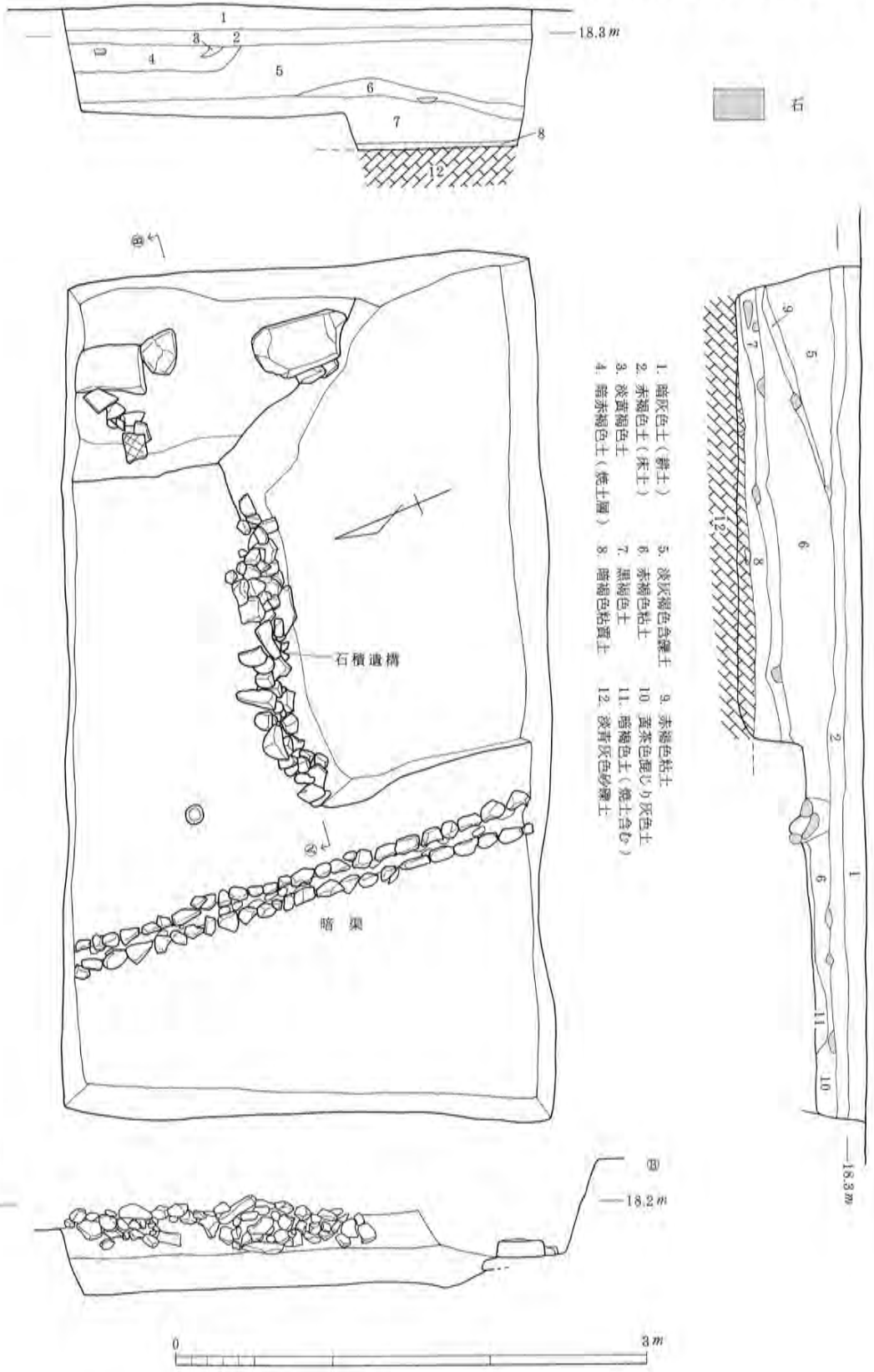
幡代遺跡遺構図及び断面図



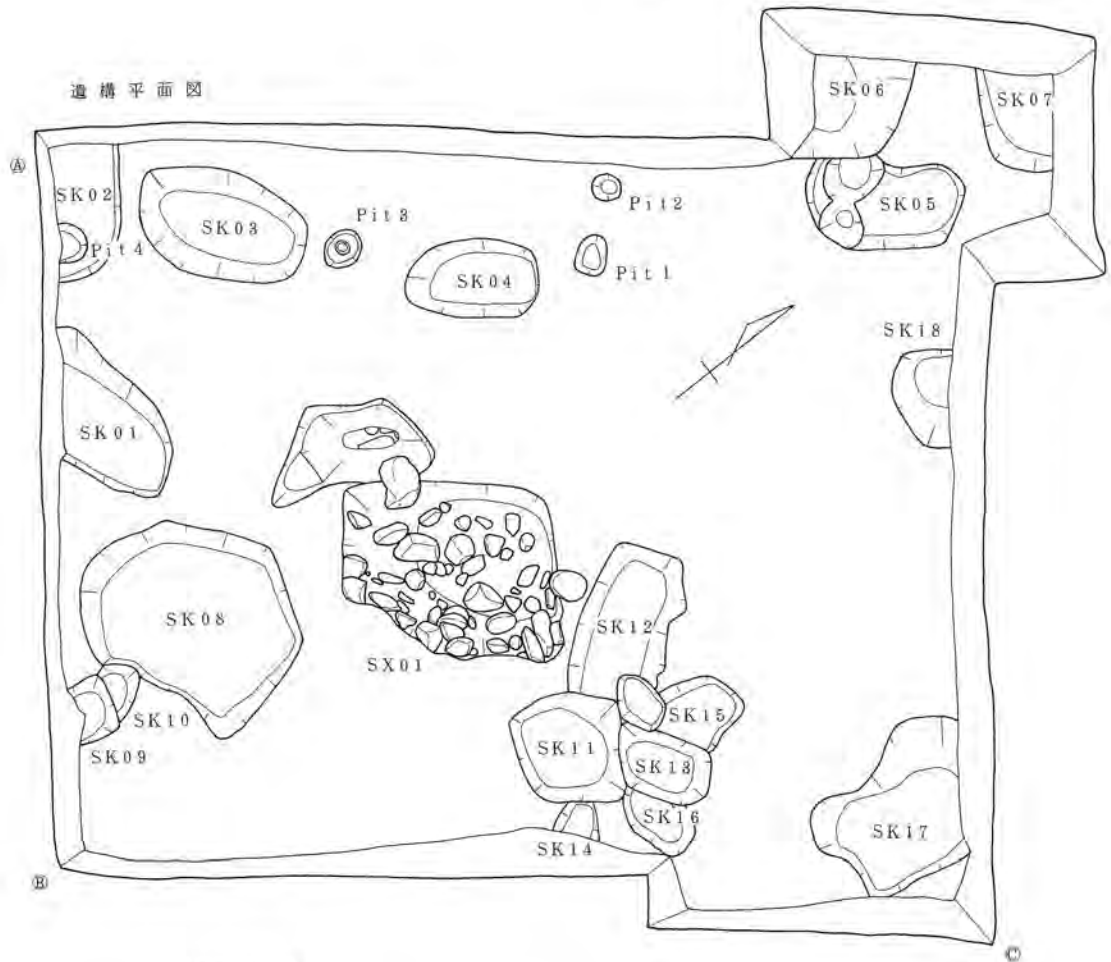
男里遺跡第10区北壁断面図

1. 盛土
2. 淡褐色土
3. 淡褐色含礫土
4. 褐黄色土

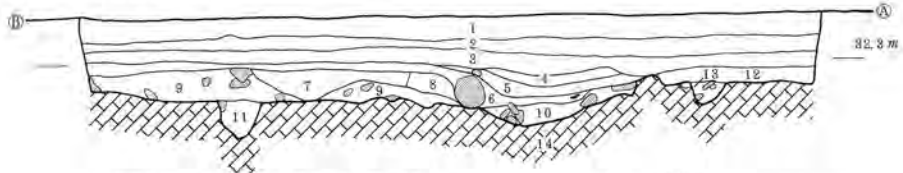




遺構平面図

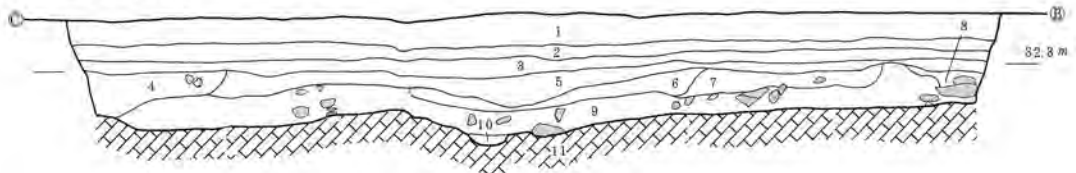


①②間断面図



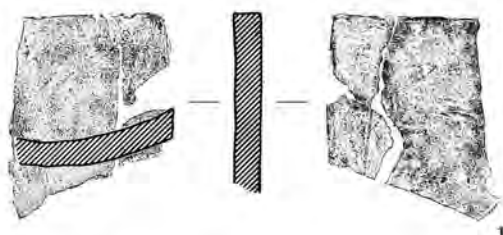
- |              |                          |                        |
|--------------|--------------------------|------------------------|
| 1. 暗灰色土(耕土)  | 5. 暗黄灰色土(砂礫含む)           | 11. 灰凝じり暗褐色土           |
| 2. 淡黄灰色土(床土) | 7. 淡褐色土                  | 12. 灰凝じり暗褐色土に黄灰白色粘土を含む |
| 3. 黄灰色土(床土)  | 8. 淡灰色土                  | 13. 灰凝じり暗灰色土           |
| 4. 灰褐色土      | 9. 暗灰色含礫土                | 14. 暗灰褐色砂礫土            |
| 5. 淡灰褐色土     | 10. 灰凝じり暗褐色土に黄灰白色粘土を多く含む |                        |

②③間断面図



- |              |          |             |
|--------------|----------|-------------|
| 1. 暗灰色土(耕土)  | 5. 暗黄灰色土 | 9. 暗灰色含礫土   |
| 2. 淡黄灰色土(床土) | 6. 淡灰色土  | 10. 淡灰色含礫土  |
| 3. 黄灰色土(床土)  | 7. 淡褐色土  | 11. 暗灰褐色砂礫土 |
| 4. 淡灰褐色土     | 8. 暗灰色土  |             |

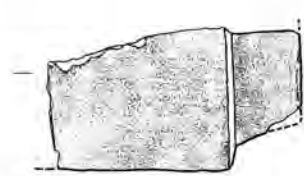




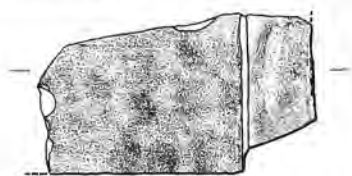
1



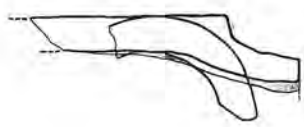
2



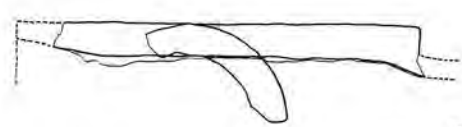
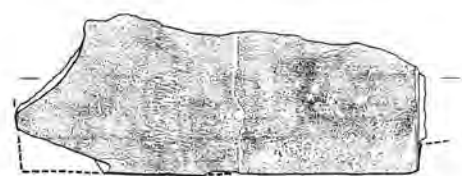
3



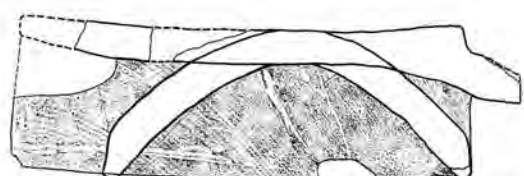
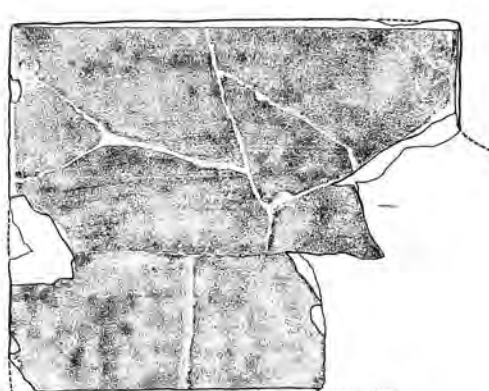
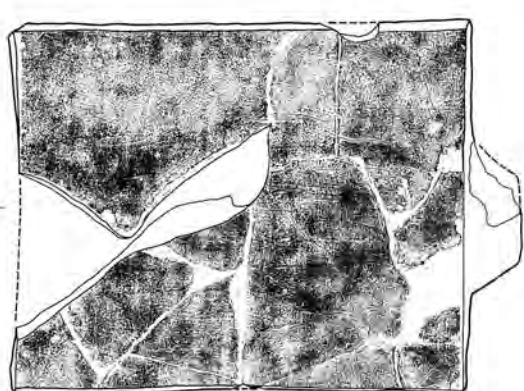
4



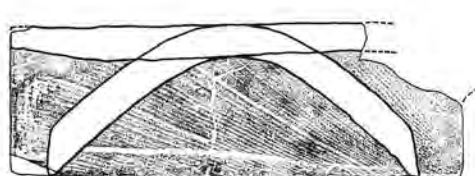
5



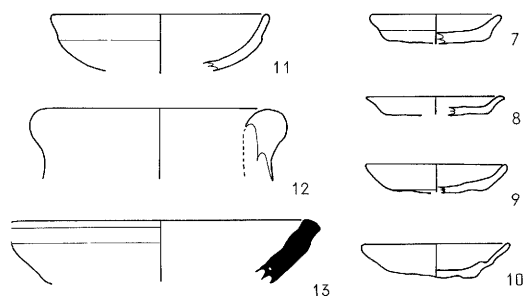
7



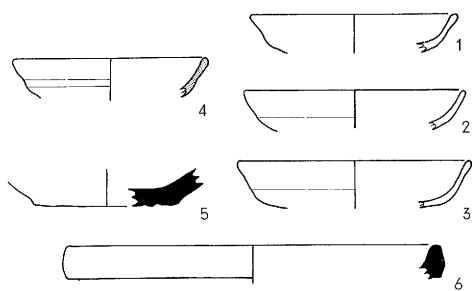
6



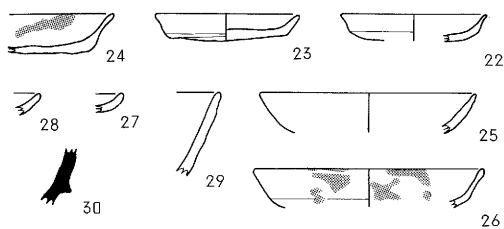
PL. 8 岡中遺跡遺構出土の土器



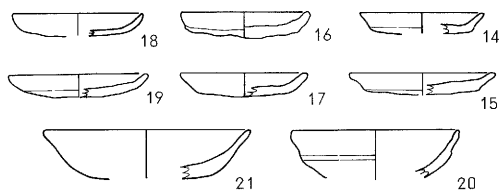
集石遺構



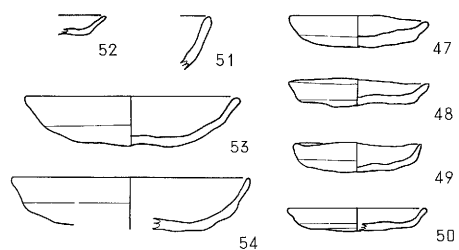
SK 01



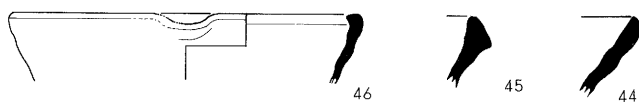
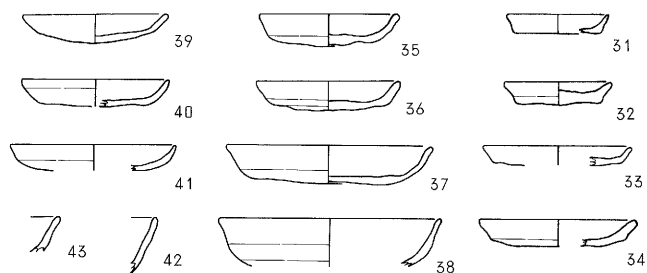
SK 05



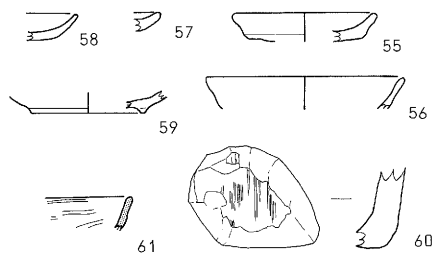
SK 11



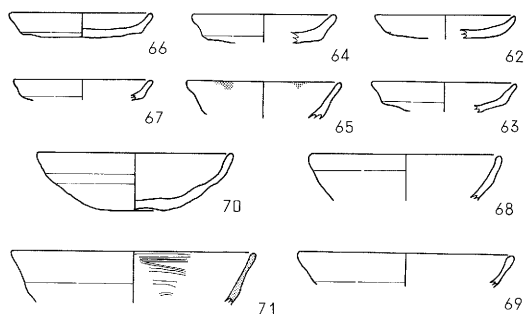
SK 13



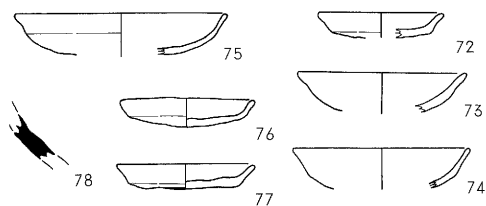
SK 01



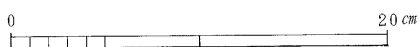
SK 07



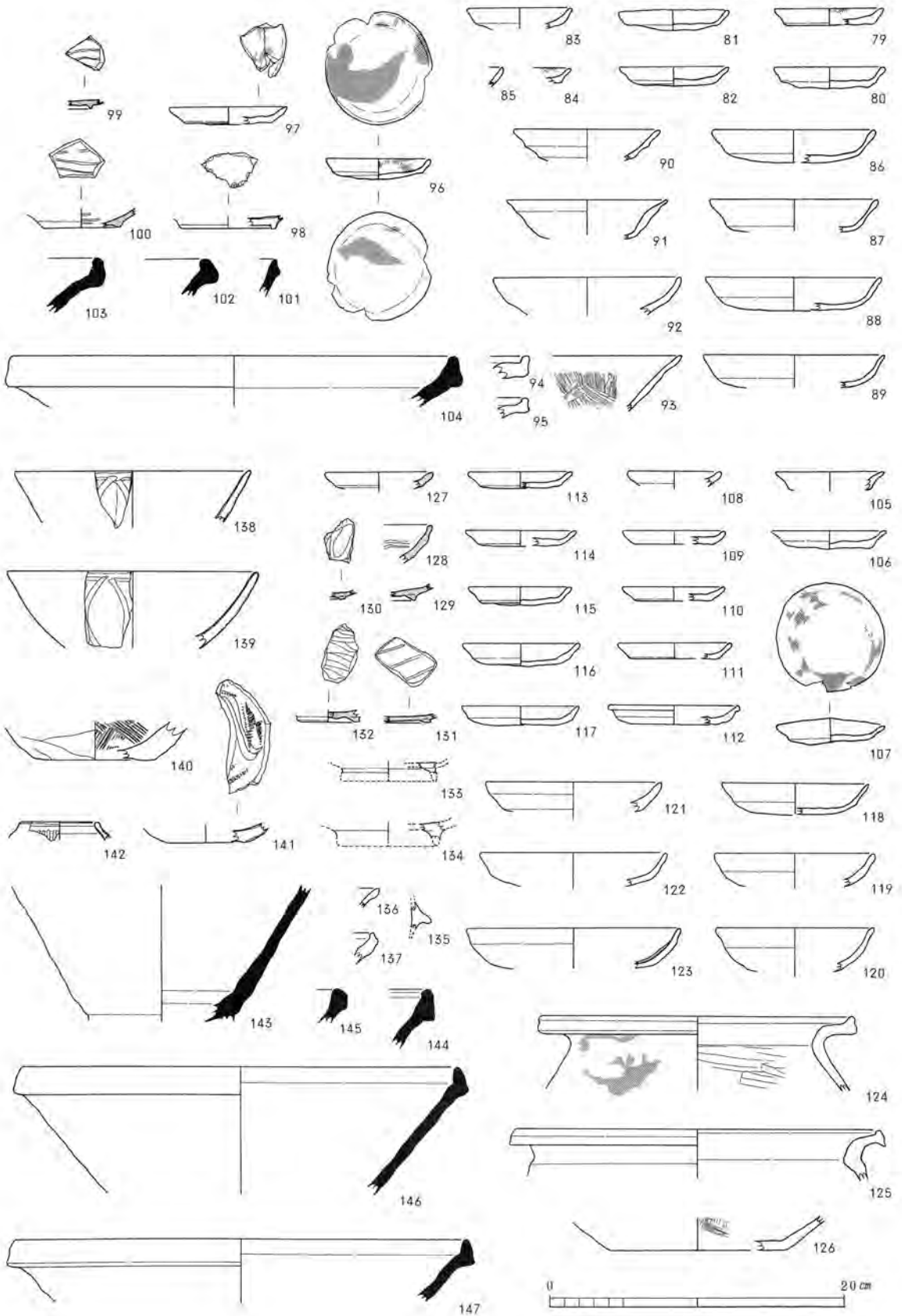
SK 02(67)・04(69)・06(62, 65)  
SK 09(71)・12(70)・17(64)  
SK 18(68)・19(63, 66)



Pit 1・2, 集石土坑



PL. 9 岡中遺跡包含層出土の土器





全景（北から）



土坑（北から）



全景（西から）



全景（東から）



第4区北壁（南から）



第5区1トレンチ（南から）



第6区（東から）



第7区（南から）



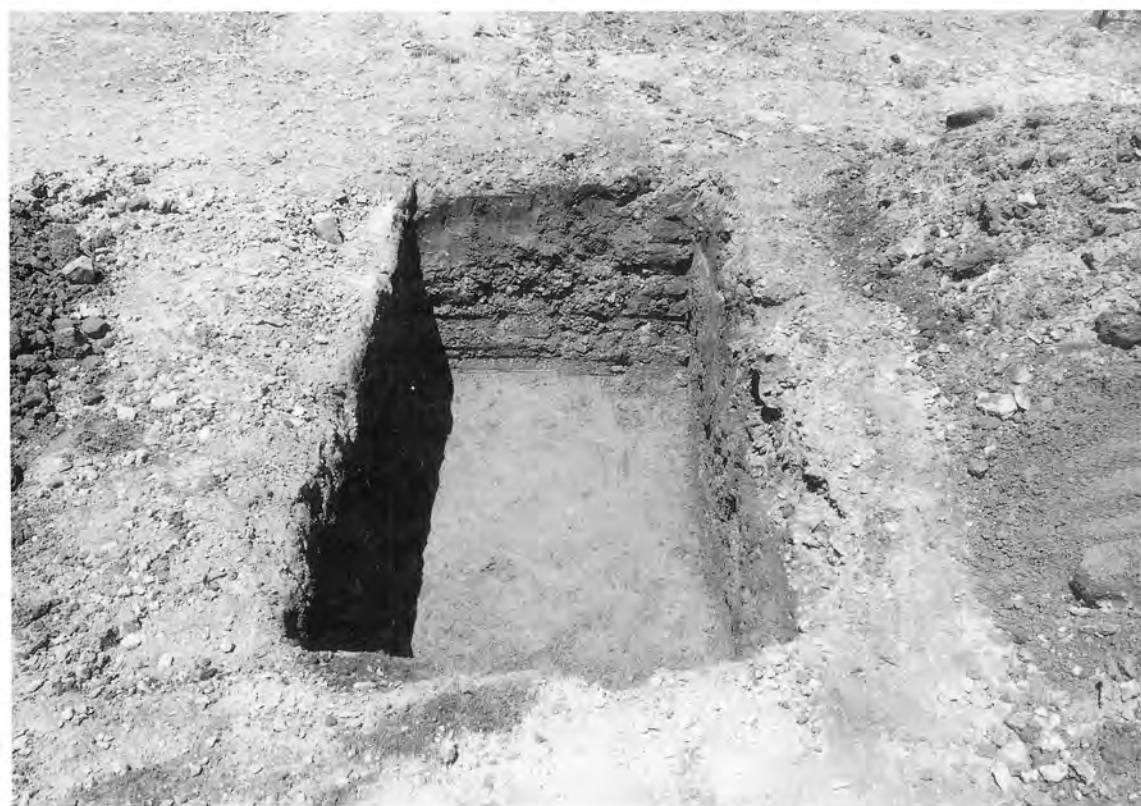
全景（西から）



同上（北から）



第9区（南から）



第10区（東から）



全景（東から）



溝（南から）



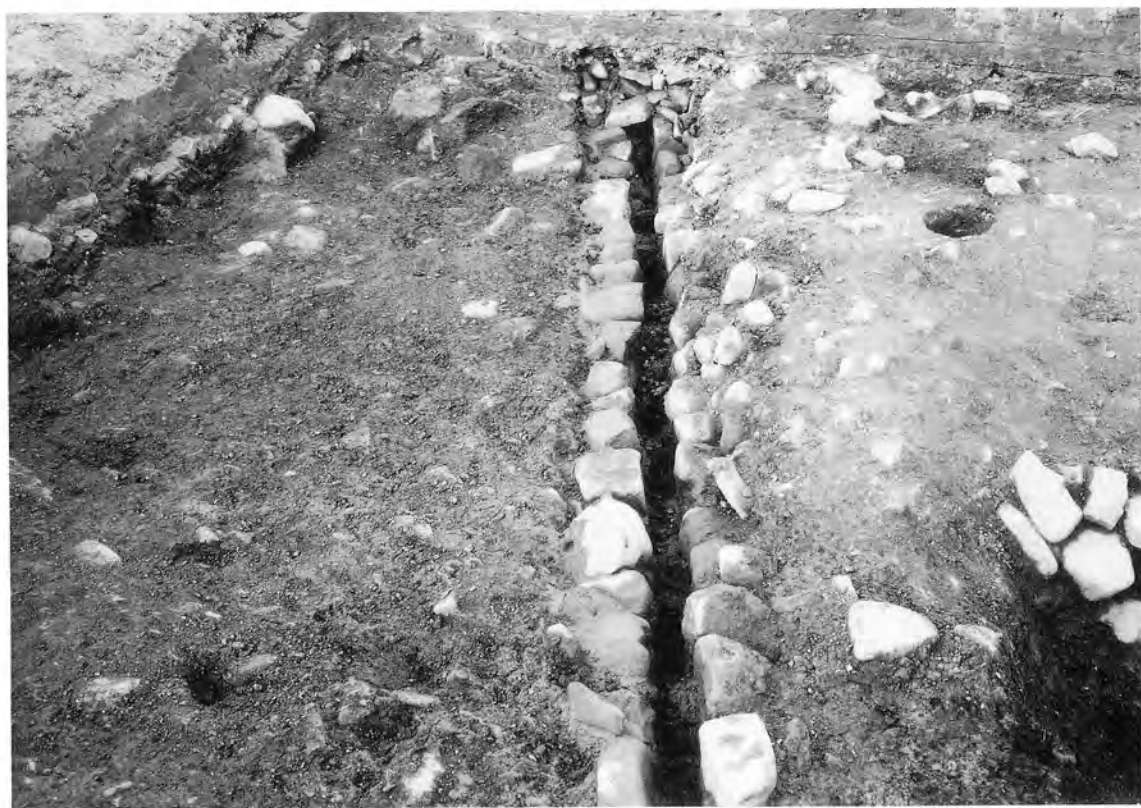
全景（西から）



同上（東から）



石積遺構（北から）



暗渠（南から）



全景（北西から）



同上（北東から）

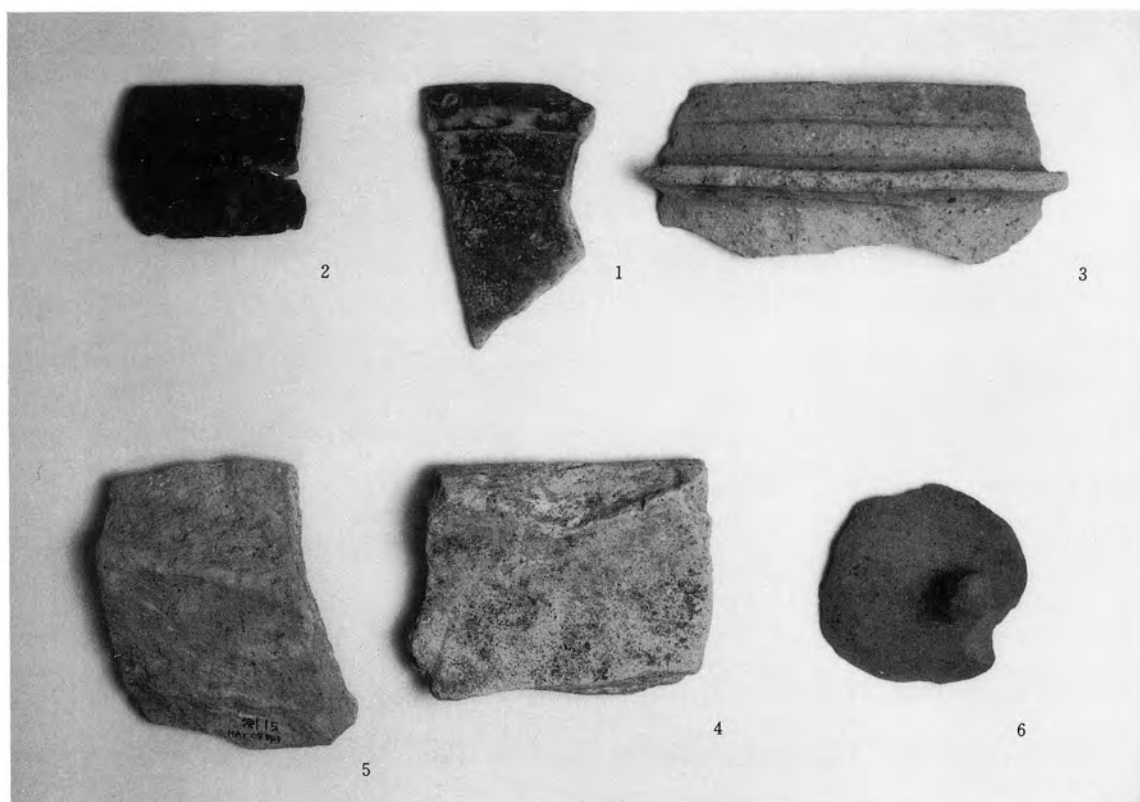


集石遺構 (北東から)

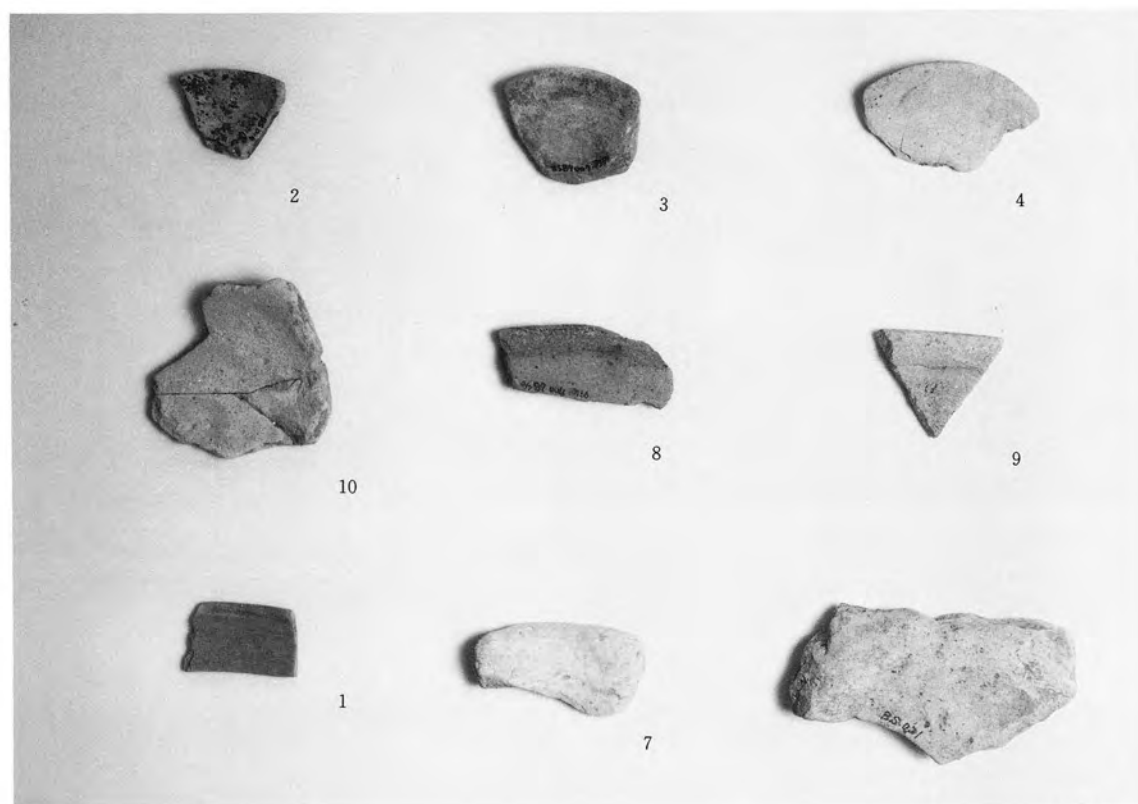


SX01 (北西から)





幡代遺跡



仏性寺跡



仏性寺跡



岡中遺跡

